

---

# ファウストの四肢と魔術師

dog ster

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ファウストの四肢と魔術師

### 【NZコード】

N5540F

### 【作者名】

dog ster

### 【あらすじ】

偶然見てしまった幼馴染の秘密。物語はそこから始まる。彼女の四肢に隠された秘密と、彼女を狙う魔術師の影、さらに見え隠れする敵 無気力非力な少年久野稜は果たしてどうなつてしまつのか？ 彼らが向かう先とは・・・。

## 第一章 悪魔の四肢を持つ少女

少年の名は久野稜、十七歳。お世辞にもかつこいいとは言えないその平凡な顔立ちに、何かに疲れた中年のサラリーマンを想起させる目、おしゃれという言葉を忘れたかのような服装と髪型。運動も勉強もけつしてできるわけではない。常に何を言われても決して笑わず常に微笑みを浮かべるだけの「地味」という言葉が最も相応しいであろう少年は珍しくその表情を驚きに変えていた。稜の眼が捉えているのは妖艶な美少女。切れ長の瞳にすらりとした肢体、少し茶色がかつた長い髪。・・・しかし、稜が見ていたのはそんな部分ではなく彼女の一本の足と一本の腕だった。

「・・・ばれちゃつたね。・・・驚いたでしょ、これ。」

そう言つて彼女は体とは違う色の腕を稜に突き出してくる。

「ええと・・・、その・・・これは夢じやないんだよな・・・、小夜・・・。」

稜は少女の名を呼ぶ。それは稜が常に親しんできた幼馴染の名だつた。少女の名は内浦小夜。稜の幼馴染にして同じ高校に通う生徒。そんな彼女が何故？稜は疑念を拭いきれない。

そんな稜の様子を見て小夜はただ何の感情も浮かべない微笑みで答える。

「うん、これは生々しい現実。私には悪魔の四肢がついてるの、ずっと昔から。」

「そうだつたのか・・・。」

稜はそれしかいえない。小夜は稜にとつては大事な幼馴染だつた。とはいえる、そんなにずっと一緒にいるわけでもなかつたし、そんなにまじまじと全身を見ることがなかつたから余計なのかもしれない。

「・・・それは一体何のためについてるんだ？」

もつと他にも言いたいことはあるし、小夜の体の事も気遣いたいの

に出てきた言葉は本当はどうでもいいような質問だった。

「さあ？私もこの腕でずっと生活してきてるけど腕としての能力以外には使つたことないから。・・・まあ、そんな能力は使わなくても十分威力発揮してるけどね。」

そう言つて自嘲気味の声になつて言つ小夜を見て稜は思い出す。（そういえば、小夜の両親が小夜を置いてどこかに行つてしまつてのはまさか・・・。）

疑問の点が線で繋がる。

「ふふふ・・・、稜もこれ見て私の事嫌いになつたでしょ？」

小夜の声で稜は現実に引き戻される。

「そんなわけ・・・・。」

ない。そう言おうとして言えない自分に気づいた。嘘でもいい。言つてやれば小夜も少しば救われたかもしないのに、こんなときには限つて稜の口は嘘をいつのを拒否するように開かなくなつてしまつた。

小夜はそんな稜の様子を見て子供を見るような眼で稜を見て、言つた。凛としてそれでいて寂しげな聲音で。

「これからは私に近づかないで。そうすれば、あなたは傷つかないで済むから。」

そう言つと口が沈み、すでに暗くなつた教室から小夜は出ていく。残されたのは未だ信じられない面持ちの稜だけだった・・・。

朝、起きると鳥のさえずりが聞こえる。稜は寝室のカーテンを開け、入つてくる日光に顔をしかめる。ようやく目が慣れてきて、鮮やかに晴れた空を見て昨日の事を反芻していた。

（「これからは私に近づかないで。そうすれば、あなたは傷つかないで済むから。」）  
そう言つて去つていった明らかに肌の色とは違つ、何かの模様が描かれた腕を持つた小夜。

稜は今更になつて思う。

（何で俺は「俺はそんなことでお前を嫌いになつたりしない。」つて言えなかつたんだろう。）

その場の雰囲気でなつか。それとも単に自分の口下手がいらないところで発揮されたか。

・・・それとも本当は小夜の腕を見て嫌悪したのか・・・。  
稜はそう思案して悲しくなつた、そして怒りに打ち震えた。例えどんなに素晴らしい人間だろうと聖人君子ではない。それがどこまでも平凡な自分なのだ。好き嫌いは当然ある。それでも、あの傷ついた少女の表情を一瞬見たあの後悔はそんな馬鹿な考えの自分を殺したいくらいだつた。

（けど、あれが夢だつたら・・・。つてそれはないんだよな・・・。）

小夜が帰つた後稜は頬を思いつきり抓り、その痛みを体感したから確認済みだ。そんなあやふやなので現実だといえるのかと言えば、自分が現実だと認識していれば現実なのだからこの際は気にしない。稜は自分の名前が呼ばれたことで下の階のリビングに向かい、そこで妹、久野真帆と顔を会わせた。

「よつ。」「おはよ。」「おはよ。」

短く稜は挨拶すると、テーブルで朝食を摂る父、大作と母美紀にも同じように挨拶する。

稜は自分の席に置かれた朝食を食べる最中、大作が稜に話しかけてきた。

「おい、稜。こないだの中間試験の結果を見たぞ。あの成績は何だ？担任の先生からも授業態度や生活態度が悪いという話を受けたし・・・。お前には何も期待しようとさせめて大学に行つて、普通の会社で働いてくれ。」

いつものことだ。別に稜にやる気がないわけではなく、たぶん担任は何をさせても平凡な成績と稜のやる気のない顔にその結論を見出

したのだろう。それを受けた言つた父の言葉もそろそろ飽きてきた。生涯通して常にエリートであった父にとつて自分の子供が自分から見れば落ちこぼれに見えることが許せないのだろう。そんな父の唯一の救いと言えば、稜とはまったく真逆の妹、真帆だ。真帆はエリートだった父の影響を受けて勉強も、拳句の果てには運動までもよくでき、母の影響で顔も非常にいい。年子だから常に比較される運命にあるわけだが、とにかくよくモテる。稜のところにわざわざ仲介を頼みにくる奴がいるくらいだし、真帆にいよいよ思つてもらおうするためだけに稜の友達になつた奴もいたほどだ。バレンタインデーはいつも一つももらえない稜と比べて、真帆は女子ながらもうらう立場にして、それも膨大な数を貰つてくる。ほとんどが男子ながらたまに女子からのもあつて同性からも強い支持があるようだつた。性格も悪くなく、中学校の生徒会長を二季連続でやるほど。先生受けもいいから進学も確定的。ぎりぎり進学できて、先生受けも悪かつた稜とは確かに全てが真逆だつた。中学時代はそんな状況を不公平だとぼやいてみたりもしたが、年をとるごとに何も変わらないことに気づいた稜はいつからか父のぼやきすらも適当に流すようになり、それでも劣等感を心の底では感じていたのか真帆と接する時間もなくなり、母すらも他人に思うようになつてきてよそしく、確実に稜の居場所はなくなりつつあった。

稜は家をいつもより少し早めに出る。なんとなく家に居たくなつたからなのだが、不幸かは分からぬが小夜とばつたり会つた。

「よ、よう・・・・・。」

稜はざきまぎしながら挨拶する。

「・・・・・・・・・・・・・・。」

小夜はじつと稜の顔を見ていたが、じぱりくしてふいつと顔をそむけると学校に向かつて歩き出した。

（やつぱり、だめか・・・・。）

稜は諦めて歩き出した。このとき彼はまだ何にも気づいていなかつ

た。小夜の身に起る異変や、稜をじっと見つめる存在に。

「やつぱり、今年は勝負の年だと思いますよー。」

「何が?」

興奮気味に後ろから話しかけてくる朝倉智也と、少年の言葉に稜は冷たく返す。いや、本人としてはそんなつもりはさらさらないのだが、どうしても雰囲気と相まってそう聞こえる。しかし、朝倉はそのようなことをきく人間ではないのか興奮した口調をそのままにやや音量を下げ、稜の耳元に囁いてくる。

「もちろん、彼女に決まっています! こうしてお互に彼女いない歴七年を迎えたわけですが、そろそろ進路決めが始まつて、三年生になればもう勉強に縛られる毎日なるでしょ! となれば、自然と皆が浮足立つてくる今がチャンスなのです! 狹い目の女子は比較的可愛く、しかし控え目で浮いた話のない女子となります!」

「それはお前の主観だろ。それにどこの誰が浮足立ってるんだ。」

「そんなことは関係ありません!」

「いや、あるみたいな口調だつたらうが。」

「気にしないでください!」

稜の突っ込みは朝倉の勢いに完全に消された。稜はやれやれと思うながらも、彼もまた男だ。当然女子には興味があつたし、付き合つてみたいという願望も持つていた。だから、尋ねることにした。

「で、誰がお勧めなんだ?」

「そうですね。僕の見立てだと、山城憐ちゃんとか、佐倉沙希ちゃんとかそこらへんですね。」

山城憐はクラスではさして目立たない存在の女子だが、よく見ればなかなか可愛い。昼休みになるとよく本を読んだり、たまに昼寝をしてあどけない寝顔を披露したり等、不思議な魅力を持っていた。もう一人の佐倉沙希は憐とはうつてかわって元気なスポーツマンタイプでバスケの推薦でこの学校に来たと云う通り遊びたい年ごろだろうに毎日真面目に練習している真面目さに加え、活発でフレンド

リーな性格と凛とした顔が男子から受けている。

二人とも浮いた噂はなし。ただ・・・。

「Jの一人を狙つてるやつは多いだろ?」

当然のことだ。一人とも容姿、性格面問題ないのだから、稜たちと同じような考え方の人間がいることは簡単に予想できた。しかし、何故か今回は余裕の笑みを浮かべる朝倉。そして、彼は何故そんなに余裕なのかを自慢気に稜に話し始めた。

「実はですね、憐ちゃんと僕は中学校からの知人なんです。それで、憐ちゃんと沙希ちゃんは親友でして。・・・。」

ここで朝倉は何か探るような眼で稜を見てきた。普段は鈍いはずの稜はそのときに限つて気づいた。

「まさか・・・、お前は佐倉狙いで山城に仲介を頼んだはいいけど、山城だけ余るし俺を呼んで数を合わせようつていうんじやあ・・・。」

。

「おしい!半分あつてるけど半分間違いです!」

「じゃあ何で?」

「実は憐ちゃんがあなたの事を気にいつているようでして。」

「なつ!」

顔が赤くなるのを感じる。間接的にとはいえ、人の好意を伝えられたのだ。人並みの少年、稜が赤面しないはずがなかつた。

「・・・で、どうでしじう?近いうちにどこかで遊ぼうかと思つてるんですが・・・。」

「・・・お前に任せよ・・・。」

「何の話をしているんだい?」

と、突然二人の会話に入つてくる人物がいた。渡部宗君。わたなべむねきみ稜たちのクラスの委員長にして、生徒会の書記も務める秀才。誰にでも話しあけ、親しみやすい性格、運動部にも買つてしまつ優れた運動神経を持ちながら吹奏楽部の部長として、あるいはフルート奏者としてすでに国内では有名であり、ゆくゆくは稜たちの通う県立和田島高校初のプロ演奏家となつてほしいという期待を込められた神童。ミ

二久野真帆といった感じだ。そんな彼は人の良さそうな笑みを浮かべていた。しかし、朝倉は敵意むき出しの言葉で反応した。

「君みたいにモテる人には何も言われたくありませんよ！」

しかし、まったく飾らない笑みで少し困ったように渡部は否定した。「そんなことはないよ。僕はちゃんと好きな人は一人ですっと片思ひだからね。」

「だ、誰？」

朝倉は少しきよどつて尋ねる。もし、佐倉沙希だつたらどうしようという思考で聞いているのは丸わかりだつた。しかし、渡部の口から出た名前はある意味もつとも驚きそして軽くショックを受けた。

「内浦 小夜さん。」

「マジですか！？ なかなか御似合いな感じですね。 そ�だー僕たちの計画に含めましよう！ 多いがいいですし。」

そういうと朝倉は今まで稜と話していた概要を説明する。そして、結局稜が小夜を誘うという形が決まつた。しかし、そのあとはその機会がなく、稜が小夜と会つたのはその日の夜だつた。

「回覧板、親に渡しておいて。」

小夜は極力稜と眼を合わさないようにしているのか、うつむきながら薄汚れた回覧板を突き出してくる。稜はその様子を見ながら、あまり話したくないであろう小夜の気持ちも理解しながらそれでも最後のチャンスかもしれないこのときに誘うことにしてた。

「あのさ・・・、いつかはまだ決まってないんだが、どこかに遊びに行かないか？」

「ごめん。」

即答だつた。だけどここで退くわけにはいかない。

「あのときのことはもう気にしない。小夜が忘れてほしいなら忘れる。」

「どうやつて？」

「それは・・・。」

□から出まかせのせいで何も言えなくなる。と、突然小夜が冷たい

表情を一変和らげた。

「ごめん、苛めすぎたね。・・・いいよ。あんな私の姿見てもまだ  
そうやって誘つてくれるの、とても嬉しい。」

「そうか?なら今度また連絡するから。」

そう言いつと稜は駆け出す。その後ろ姿を見ながら悲壮感漂う声で小夜は呟いた。

「これでいいんだよね・・・。」

「ごめんなさい、稜・・・。」

「ねえ、佐倉さんはどんな歌が好きですか?僕の場合は・・・。  
・。」

「本当に!?私もその歌好きなの!」

街中にあるカラオケ店の一室で盛り上るのは朝倉と佐倉。元々の  
りがよく元気な佐倉と似たようなタイプである朝倉はすっかり意氣  
投合し、すでに二人の世界を作り上げていた。

しかし、そんな二人を余所にまったく盛り上がらないのが、他の四  
人である。内気な山城と口下手で決して盛り上げ役ではない稜はし  
ょうがないとしても、クールタイプでやや戸惑っている小夜までも  
無口になれば、渡部も手の施しようがなかつた。

四人は朝倉と佐倉のデュオットでも聞きながら適当にだべるしかな  
かつた。

そんなときだつた。

「店内にいらっしゃいますお客様に連絡いたします。只今店内で火  
災が発生いたしました。繰り返します、火災が発生しました。ただ  
ちに避難経路より避難下さい。」

部屋に緊張感が広がる。それまで元気よく歌つていた朝倉&佐倉も  
顔を強張らせている。

「と、とにかく逃げよう。」

そういうつて朝倉は扉を開ける。彼は佐倉の手を引っ張り逃げ始める。  
稜もそれに続いて逃げようとして、逃げ切れなかつた。

目の前で突然火災が発生したのだから。

「まじかよ……。何で……？」

急に火災が発生したのか。とりあえず他の人間の方を振り返り、そしてその場で起こる光景に思わず稜は眼を疑つた。

「さて、おとなしくしていただこうか？」

渡部がこんなときにも関わらずすこく真剣な顔で小夜に杖を突き付けていた。

この景色をどこかで見たことがある。そつファンタジー映画の一部分だ。

「何してるんだ、渡部！ 今そんなことをしてる場合じゃ……。」

「静かにして。」

稜は隣から杖を突き付けられ言葉を今度こそ完全に失つた。

「山城・・・・？」

山城は普段とはうつてかわつて冷徹な見る者をぞつとさせる表情で稜の体に杖を突き付けていた。冗談だと笑うことは簡単だが山城の眼にはそうさせない何かがあった。

「御苦労さま、憐。」

「早く終わらせましょう。魔力干渉がひどい。」

「そうだね、・・・それでは内浦小夜君。すまないが死んでくれるかな。」

「ちょっと待てよ！」

混乱する稜はそれでも田の前で繰り広げられる会話を看過できるほど馬鹿ではなかつた。

「何だよ、お前ら！ 杖何か持つてさ。何だよ、魔力干渉つて！ 何で小夜が死ななきやいけないんだ！」

普段は出したことのない大声に渡部は少し驚いたような顔をして言った。

「君は小夜君のあれを見たはずだよ。」

あれ つまりは小夜のものではない四肢。

「だったら何だつていうんだ！？」

「あれを説明していないのか、「悪魔のファウスト」」

稜の様子に山城は小夜の方をじっと見つめた。小夜は半泣きで実際潤んだ声で言つ。

「してないわ。」

「なるほど、愛する人を巻き込みたくないという美しい感情か。まあ、本当のところはあんなくだらないことでこの世の摂理を曲げ、協力した魔術師を裏切つたくらいだから、ただ単に不都合なことで知られたくないだけか。」

渡部は納得したように言つ。

「違う・・・。」

小夜が心もとない声で反論するが、渡部は気付かないように振舞つて稜の方を向いて、大仰な身振りで話し始めた。

「君は小夜君の四肢について不思議に思つたことはなかつたか？」

「それは・・・。」

「よく考えてみたまえ。君は異性でそんなに付き合いも深いものじやなかつたから今まで彼女の四肢について知る機会はなかつたかもしれないが、同性の人間は着替えなどで知る機会があるかもしれない。しかも彼女の四肢は生まれた時からあれだつた。今までの十六年の間なら必ず誰かの眼に晒されたはずだ。それなのに何故小夜君は両親と君以外に見られたものがいないのか。それは彼女が一ヶ月前からの彼女にかかるほぼ全ての記憶を消したからだよ。我々が所属する現代魔術師の結社「銀の夜」に依頼してね

「「銀の夜」・・・？」

「魔術集団のこと。私たちのような人間が加入して、活動している。規模は世界全体で1万人。」

山城が説明する。

「要するに秘密結社みたいなものか。」

「御明察だ。我々はその依頼を引き受け、実行した。・・・にも関わらず彼女は対価を支払わなかつたのだ。さらに、間の悪いことに我らが聰明な頭首エドワード・ミランは自分以外の人間すべてに忘

却魔術をかけてしまつたせいで、小夜君の監視役として来ていた僕と憐はその事を忘れていた。君が小夜君と話しているところを我々が見るまではな。」

（その頭首聰明じやないだろ・・・。）

と、稜は心の中でつっこんだが、もちろん表には出さない。しかし、あのとき。偶然宿題を取りにいつて、そこで見つたあのときがこんなところにまで影響を及ぼしているとは正直意外だった。

「そうして本来の僕たちの役目を思い出し、今ここでこうしているのさ。」

そうすると、渡部は再び小夜に杖を近づけた。

稜は焦り、渡部に対して尋ねる。

「ち、ちょっと待ってくれ・・・。その対価つていつのを払えばいいんだろう? だつたら・・・。」

「無理だね。対価は小夜君の命なのだから。」

「・・・・・・・・・！」

稜は絶句した。その様子を見た渡部はもつ話すことはないという風に小夜に向きなおり、言った。

「覚悟はできるね?」

「ええ。あなたには殺されないから、覚悟するつもりもないわ。」

「なんだつて?」

「やつてみれば分かるわ。」

小夜の挑発ともとれる発言に渡部は怒りを露わにする。

「僕を馬鹿にするとはいひ度胸だ! 「断罪の業火」!」

その瞬間渡部の杖から炎が吹き出し、小夜を囲み、そして、小夜を燃やした。

一瞬の出来事に稜は呆然としていたが急に正気を取り乱し、小夜の名を呼ぶ。

「小夜!」

だが・・・。

「心配いらないわ。私が魔術で死ぬことはないから。」

そう言つて小夜は何事もなかつたかのようになににいた。渡部は思々しげに舌打ちする。

「やはり、「悪魔のファウスト」の四肢は我々の力では・・・・！」  
「当然よ。あなたのような三流の魔術師の魔術程度じゃ私の四肢から放たれる呪力の壁を破ることなどできない。」

その小夜の言葉に稜は氣づく。初めて小夜の四肢を見た時に小夜自身が言つていた言葉。

（「さあ？私もこの腕でずっと生活してきてるけど腕としての能力以外には使つたことないから。・・・まあ、そんな能力は使わなくとも十分威力發揮してるけどね。」）

まあ、一度小夜に関する記憶をすでに消された稜とは違い、今までの記憶を全て保持している小夜ならそれくらいは知つていたかもしない。それでも稜は悲しくなつた。

見られた後でも言わなかつたということは信頼されていなかつたのだから。

「ならば、「最終の炎」で！」

渡部は再び杖の先を光らせ、小夜に向けて放とうとして、水を被つた。ものすごい勢いで。見てただけの稜が思わず身震いするほどのコントみたいなかけられ方をして。

「宗君、そこまで。「最終の炎」を使えばあなたは死ぬし、私たちも無傷ではいられない。私は今思い出したけれど、ミスター工ドワードにあることを頼まれていた。

「もし、小夜を殺せなかつた場合は貴方達は「悪魔陣の創造主」たちの手から守るため守護者に任命します。」と。  
渡部ががくつと頭を垂れる。そんな様子を知つてか知らずか無視して、稜を見て言つた。

「というわけです。今日はお帰り下さい。御分かりにならないことがあるようでしたら後ほどお受けいたします。」

「あ・・・ああ・・・。」

毒氣の抜かれた表情を見せる渡部を引きずりながら部屋を出て帰つ

ていく山城を見送った稜は小夜と一人きりになつた。

「帰ろつか。」

小夜はほんのりと微笑むと歩き出す。すでに火は消えていた。

「あのさ・・・、何で嘘なんかついたんだよ・・・。」

星がまたたいて静かな夜の道を並んで歩く稜は隣の小夜に問うた。

「ごめん・・・。けど、何故か稜に知られたくないって・・・。」

「俺は気にしない。そう言つたはずだ。」

「けどね、ダメだつた。苛められた時の記憶が蘇つてくるの。」

「苛められた・・・？」

まったく記憶にないから記憶が消される前の話だらうと納得する。小夜はぽつぽつと語り出した。

「私のこの四肢が同級生にばれたのは体育の時間だつた。その日も長そで長ズボンで授業を受けてたんだけど、先生が許してくれなくて、泣いたのに、それでも駄目で結局・・・。そこからだつた。私の四肢を見た人間、そうでなく噂で知つた人間・・・。私は嘘めの対象になつた。私は無視し続けたけれどどんどん手口が悪化して、それでふとした瞬間に死にたいつて思うようになつて・・・。昔から私を監視している人間の存在は知つていたからその人たちに楽に死なせてほしいつて頼んだの。そうしたら、頼んだ人がこの世の中では何か死ぬ前にしておきたいことはないかつて聞かれて・・・。」「それで皆の記憶を消してほしいつて言つたのか・・・。」

「本当は私みたいな人間の存在を消すためにお願いしたつもりだつたんだけど、私の四肢のことを覚えていない人が全ての世界を見て・・・。」

「もう一度やり直したいと思つたのか・・・。」

小夜は頷き、そして稜のやや前方まで小走りでそしてくるつと回つてそこで稜に尋ねた。

「どう? ひどいでしょ、私。逃げたくても逃げられずに戦つてる人たちがいるのに、同じ境遇の私は安易に逃げた。それもたくさんの

人を巻き込んで。私の力のせいで……なんていう意味のない恨みまでその人たちに押しつけてさ。……それに今日だつて稜は危ない目にあつたよね？だから……。」

稜は不思議と今小夜が考えていることがなんとなく分かつた。小夜の体を見た時に言われたことだ。

「これからは私に近づかないで。そうすれば、あなたは傷つかないで済むから。」

なるほど確かに的を射ていた。

「確かにお前はよくないことをしたと思う。それでも、小夜はもう一度人生やり直したいと思った。……だったら、次はもうさせない。俺がお前を守つてやる。ついでにお前のそれを狙うやつからも。」

「ば、ばか……。」

小夜は顔を赤くして、視線を彷徨わせる。きっと本当は稜を頼りたいのだろうが、今までの境遇が小夜を素直にさせにくくしていた。稜は微笑み言つた。

「それに・・・、まだ小夜のことよく知らないって分かつたし、小夜の事を知るという意味で勝手にそばにいる。」

「ストーカー？」

「似たようなものだろ。」

「・・・・それっていいな・・・。」

静かな周りに負けないくらい静かな声で小夜は呟いた。だが、稜には聞こえず聞き返す。

「今、何て・・・。」

「何でもない！」

小夜は大きな声で遮ると、家に向かつて走り出した。何故走り出したかはよく分からない。ただ、とても清々しい気分で、それをもつ

と感じたくて気づけば走っていた。後ろから感じる稜の気配。小夜はこれから始まる生活に心躍るのだった……。

銀の夜、本部

「お呼びでしょうか？ エドワード・ミラン様。」

若い魔女の格好をした少女が前で椅子に座つて不敵に笑う自称三十二歳の、しかしづつと前から「銀の夜」の頭首として君臨する謎の男。

エドワードは笑みを崩さず前で礼儀正しく少女を見ながら言った。

「・・・私の「予知眼」が、非常に興味深いものを見させてくれた。」

「どのようなものでしょうか？」

少女は尋ねる。エドワードは瞑想して一つ一つの言葉を噛みしめながら話し始めた。

「一人の巨大な魔方に小さなされど強い輝きを放つ光がまとわりつき、あげくに燃え上がる炎と静かな水が魔方の周りを彩り、そして、世界の正の力を持つた大きな力の何かが魔方の元へと行きやがてその魔方が浄化されていくんだよ。・・・面白いと思わないかい、ミス・エバアン。」

エブアン・エリス。それが彼女の本名である。エリスはやや考えるような仕草をしたあと溜息をついて、エドワードを見た。

「今回我々から派遣された二人・・・、渡部宗君と、山城憐。宗君の方は「導火の魔術士」という一つ名で呼ばれる火の魔術師。憐は「水鏡の魔術師」という一つ名の水の魔術師。

まさかとは思いますが予言どおりになさるつもりですか？」

「いや、勝手になつてた。ほんの偶然だつたんだけどね。」

「・・・まさか！」

「これをどう思う？ エリスちゃん？」

「それが事実ならば魔方は内浦小夜、光は・・・、報告にあつた久野稜という少年・・・。ならば正の力を持つ人間というのには？」

「さあね？」

エドワードは肩をすぼめ、けれど凛とした口調でエリスに言った。  
「だけど、たぶん「悪魔陣の創造者」たちも動き出す頃だろう。あまり時間がない。だから・・・、わざと探そつか。」

エリスはエドワードを見て、複雑に思う。

いつもこれくらい仕事してくれたらしいのこと。

## 第一章（後書き）

非常に拙い文章です。読みにくい、あるいは違和感を覚える場合があるかもしれません、暖かく見守つていただけたと嬉しいです。

### 第二章 強き力

普段とは何も変わらない朝。しかし、稜は一味違う朝を送ることになっていた。

まず一つ目は小夜の存在。中学校に入学するころから、なんだか気恥かしくて一緒に登校するのを止めていたのだが、昨日の事件の後、稜が「守つてやる」的な事を言つたことで今日から一緒に登校することになつたのだ。

「小夜は分かるんだよ・・・。だが、何でお前たちが一緒何だ?」「おやおや、二人だけのアバンチュールを楽しみたいのは分かるんだがね、君だけじゃ心配なんだ。」

渡部は稜の冷たい眼をどこ吹く風で受け流す。

「あなたは無力。それにこれは私たちの仕事。気にしないで。」

そこに山城が容赦ない一撃。稜はやや傷つきながら、尋ねる。

「と、いうか、誰が俺たちを襲うんだよ?「銀の夜」とかいうのはお前たちがいるし、襲つてこないんだろ?」

「私たちの組織にも殺せという意見はある。けれど、現状では「悪魔の四肢」を破る魔術を使えるものはいない。」

「ええと・・・、要するに・・・。」

「当分はない。」

「そ、そうか・・・。」

「だがね、僕たちとは違う組織が小夜君を狙いにくるかもしね。」

「違う組織?」

渡部の眼が急に真剣になる。

「「悪魔陣の創造者」・・・。」

「私たちと敵対する呪術師集団の事。」

山城が補足する。

「どうか、前から気になつてんだが、呪術と魔術ってどう違つんだ？」

「呪力を使う術式と魔力を使う術式の差だけよ。いろいろ思想とかは違つみたいだけど。」

「小夜が言つと、山城は繋ぐ。」

「魔力とはこの世界の正のエネルギーの事で、呪力とはこの世の負のエネルギーの事。」

「けど、それと小夜の四肢とはどういう関係にあるんだよ？」

稜は尋ねる。

「彼女のそれはゲオルク・ファウストの四肢。悪魔に魂を売り、その代償として「下の世界」へと持つていかれたもの。」

「ゲオルク・ファウストというのは十六世紀のドイツ人の鍊金術師でね。鍊金術というのは元来が魔術と原理が似ていたため、魔術師であるという認識だつたんだが……。」

「彼は己の愚かな欲望のために悪魔を呼び出そうとした。」

「だが、悪魔というのはものすごい力と器を持つていて、故に召喚陣を書いたんだが、いかせん一人の人間で呼び出すのは無理だつた。そこでファウストは考えたのだ。どうすれば、悪魔を一人で召喚できるのか？」

渡部と山城の交互に行われる説明を聞きながら稜は次の質問を紡ぐ。

「何でファウストは一人での召喚にこだわつたんだよ？」

「彼の野望は世界征服だつたといつてもかい？」

渡部は嘲笑を浮かべる。しかし、それは稜に向けられたのではなく、その場にはいないファウストだつたような気がした。

「世界征服に一人もいらないか……。」

「そう彼は絶対の支配者を目指し、そして彼は一つの方法を見出しだんだ。」

「まさか……。」

「そう、悪魔の体を構成する負のエネルギーが集まりやすい自らの四肢に召喚陣を書いた。そして、実際に彼は悪魔を召喚し、彼は絶

対的な力を手に入れたはずだったのだが……」

そこで渡部は話を区切った。

「結局悪魔の力に耐えきれず、五体がばらばらになつたんだ。その様子を記したファウストの部下の手記が我らの組織にあつてね。こう書いてあつた。

「私、ユストウスはファウストが悪魔に四肢を引きちぎられ、頭が飛ぶのを見た。悪魔は私を見て言つた。『永久の輪廻がこれから始まる』と。」

「なかなか壮絶だろう?」

渡部はなんともいえない複雑そうな顔で言つ。それは悲しそうであり、それが当然であるとでもいうような顔。

「それで、彼女の四肢は一度は『下の世界』に落とされ、悪魔の力に直接干渉したせいで普通の人が持つ負の力、呪力の何千倍もの呪力を持つようになつた。」

「僕たちがカラオケで言つていた『魔力干渉』というのは小夜君の四肢が放つ呪力によつて僕たちの体を構成する魔力が中和されるところなんだ。」

「魔力が体を構成……?」

稜の怪訝な顔を見て渡部は説明する。

「僕たちが魔術を使えるのはこの世の正のエネルギーを理解し、それによつて人間だれしもの体にある魔力と呪力のうち、魔力を増幅させたからなんだ。僕たちの魔術は周りにある魔力と自分の体内にある魔力を重ねて発現させるものということ。」

「けれど、この世の負のエネルギーである呪力と魔力がぶつかると、中和され、「中性力」というものになる。科学でいうところの酸性と塩基性みたいなもの。中和が起きると、魔力を体内に多く取り入れて、魔力を体内の構成物質としている魔術師は命の危機に晒される。」

珍しく長く話した山城にまた疑問が起ころる。

「じゃあ今までよく生きてたな。長い間監視してたんだろ?」

「問題ない。これも今日思い出したんだけど、対呪力用に御守りも  
らつておるから。」

「やうなのか……。」

稜は朝の通学路で思った。カラオケのときは気まぐれで何も話せなかつたのに、今は一応の敵であるにも関わらずなかなか話が弾んでいる。質疑応答だけど。

「どうか急いだ方がいいんじやないか？」

「そうだね。」

「問題ない。空間転移で飛ぶ。「時空の歪み」。」

そう言うと山城は杖を振る。しかし、何も起きない。

「そういえば、それがあった。」

そう言つて恨めしげに小夜の腕を見た。

「つて、できないことはするもんじやないと思つよ。」

渡部はやれやれといった感じで走り始める。

空は青い。もうすぐ、夏だ。だが、台風はもうすぐ迫りつつあった。彼らにもまた。

「Hスター・Hドワード。一体何の御用ですか？」

エリスは不機嫌に目の前の上司を睨みつける。

「ミス・エブアン、そんな怖い顔をすると可愛い顔が台無じだよ。」

「冗談は止めてはやく本件を。」

「まったく……。」

Hドワードはやれやれと首を振ると、エリスにとんでもないことを言つた。

「君に日本に飛んでもらいたい。」

「はっ？」

「言葉通り、日本に行つて例の監視対象の監視に努めてくれたまえ。」

「ば、ばかな」とを……。そんなことをすれば、Hの本部を守る

「堅牢の魔術師」の私がいなくなりますよ？」

「「霸矛の魔術師」がいれば大丈夫だよ。それに「悪魔陣の創造者」のメンバー数人が日本へ飛び立つたという報告があつた。時間がないんだよ、ミス・エブアン。」

「……………分かりました。」

エリスは部屋を出ようとしてそこで長年一緒にいた上司を鋭い目つきで睨みつけ、言った。

「「奏楽の魔術師」、「聖印の魔術師」、「審問の魔術師」、「守宝の魔術師」私達の祭具を守

りし四人の魔術師だけでなく、「憤怒の魔術師」、「獅力の魔術師」といった主力となる魔術師までも外へ派遣していますね……何を考えているんですか？」

「さあ？ ただ必要になつただけを派遣しただけだけど？」

「食えない人ですね。」

それだけ言い捨てる、エリスは準備をしに部屋を出る。エドワードはまだ静かに微笑むだけだった。

「つてわけで、皆でプールでも行かないですか？」

朝倉はにやけた顔で昼休みにそう誘つてきた。佐倉は元気よく一番に返事する。

「はいはーい！ 私行く！ いいよね、朝倉君？」

「もちろんです。」

なんというかすでに付き合つてます的な雰囲気を見せつける朝倉と佐倉。

それに比べて複雑な残りの四人、稜、小夜、山城、渡部。

「いいですね、僕も同行させてもらえますか？」

と、渡部が口火を切る。

「じゃあ、俺もいいかな……？」

稜がそれに続く。

「……………。」

だが、あの二人の返事がない。

「あれ、どうしたんだい？ 君たちが行かないと、華がなくなるんだけど。」

渡部は朝倉たちに見えないようひきつった笑いを浮かべる。稜は納得する。

たぶん、なし崩し的に朝倉と佐倉が一緒に動く。そうすると、今のもンバーで、となると渡部と稜の一人で行動することになる。なんだか絵的に華がないし、きもちわるい。

「けど、私……。」

小夜はおどおどとした表情で何かを言いあぐねる。

「あっ、そうか……。」

稜は小夜の四肢の事を思い出す。確かに人目に触れたくないと思うのは当然かもしれない。

「……嫌。」

渡部に視線を向けられていた山城は何故か頬を赤らめながら首を振った。

これは参った。

稜は諦めたように渡部を見て驚いた。彼がいつになく真剣な、カラオケで小夜に杖を向けていた時くらい真剣な顔で何かを考えていた。そして、いきなりとんでもない発言をした。

「憐、胸がないならパッドを入れればいいだけなんだ。」

「……死ね！」

朝倉と佐倉が見ていない瞬間を狙つて水で作った拳骨で思いつきり渡部を殴つた。

と、渡部が倒れる。その場所には小夜がいた。ふだんなら小夜は渡部を受け止めてあげたかもしれない。それなのに今日に限つて受け止めず、避けた。

「ぐえつ！？」

みつともない声を上げ、渡部は気絶した。

見れば、小夜が山城に何かを耳打ちし、それに山城がやや微笑み頷

く。傍から見ればとても仲のいい女の子同士が秘密の話をしている  
よつで微笑ましい。と、小夜と稜は眼が合つ。

「何にやけてるの？もしかして・・・、私たちの話聞いた？」

「は？」

「な、わけないよね。」

小夜は目の前の弁当を食べることに集中し始める。山城も同じよつ  
で、稜は所在なさげに朝倉たちの話を聞きながら、熱いくらいの日  
差しを受けていた。

チャイムが鳴り、生徒たちが思い思いに散つていいく。稜は前方で  
座つている小夜に声をかける。

「帰ろうぜ、小夜。」

「「めん、今日は山城さんと用事があるから。」

「えっ？」

驚きだつた。いつのまにそんなに仲良くなつたのだろうと思つ。と、  
小夜が恥ずかしそうに稜を見て言つた。

「それと、プールの話なんだけど、行くつて朝倉君に伝えてもらわ  
るかな？」

「いきなりどうしたんだ・・・？」

「内浦さん、行こ。」

「ごめん！山城さんが呼んでるからまた後で！」

小走りで去つていいく小夜を見て稜は不思議に思いながらも、朝倉に  
その旨を伝えると、帰つた。そして、日は過ぎ、プールに行く日にな  
つた。

プールには現地集合ということで、稜は早めに起きると準備をし  
始めた。と、物音に目覚めたのか真帆がリビングに入つてきて、眠  
たそうな眼をこすりながら、稜に尋ねた。

「何してるの？」

「いや、今日友達とプールに行く予定でさ。それで準備してたんだけど・・・、悪い、起こしたか？」

「ううん・・・。私も今日は私も遊びに行く予定で早起きしたから・・・。」

それだけ言つと真帆はいろいろと準備し始める。

稜は準備が終わると、部屋へと戻り、マンガを読み始めた。

それから暫くして下の階で呼ぶ声がして、リビングに入るとすでに朝食が用意され、大作がご飯を食べていた。

「おはよう。」

「おはよう。」

母からはかえされるものの父、大作からはない。だが、いつものことなので席についてご飯を食べ始める。暫くして、いつもは無口な大作が稜に話しかけてきた。

「いつもお前に言つてきたと思うのだが、お前は真帆と違つて何もできないんだから、せめてこのような休日くらい勉強しようと思わんのか？」

「けど、今日は友達と約束があるから・・・。」

「ふん。友達など高めあえる存在以外は必要ない。」

「・・・。」

稜は食べ終えると、外へ出る。すでに門の前では小夜が待っていた。ところが、稜は小夜の格好を見てあっけにとられる。なんと、あれほど忌み嫌い、人の目にさらされるのを嫌がっていた小夜がノースリーブの白いワンピースを着ていたのだ。

「小夜、大丈夫なのか？」

稜の質問の意味が分かつたのは小夜はにこりと笑顔になり答えた。

「大丈夫よ。山城さん・・・じゃなかつた憐が私に魔法掛けてくれたから。」

「けど、小夜の四肢は魔術を消すんじゃあ・・・。」

「うーん・・・。良く分かんないけどそれの影響を受けない術式らしいわよ。・・・ほら。」

目の前を一人の男が通つたが、特に何も反応を示さない。

「すゞいな・・・、山城は。」

「そうよ。憐は何でもできるの。感動したわ。それに・・・。」

「それに?」

「な、何でもない！行こう！」

小夜は何か言いかけて止めると、元気よく歩き出した。

それを見たときふと嫌な予感が稜はした。よく分からない。何故なのかはただふとした瞬間でそれを思ったのだが、すぐに思いなおす。（まあいいか。今日は楽しい日なんだから。）

だが、それは思いすゞしなどではなかつた。のちに彼はとんでもない騒動に巻き込まれるのだから。

「やあ、おはよう。お一方！」

朝倉がぶんぶん元気よく手を振る。

「おーい！」

佐倉もそれに追随して手を振る。何というか元気な一人だった。それに比べて渡部と山城は元気がない。どこかげつそりした感じもある。

「おい、どうしたんだ？」

稜は渡部に尋ねる。と、彼は朝倉と佐倉に気を使いながら稜にぎりぎり聞こえるくらいの声で返してきた。

「実は自宅が何者かに襲撃されてね・・・。憐も同じで・・・。夜通しで警戒にあたつていて寝不足というわけだ。」

なるほど、確かに山城も気づけばうつらうつらとしていた。

「まあ、たぶん痕跡から辿るに呪術師の仕業だらうと考えられるんだが、いかんせん本部も混乱しているようで・・・。自分の身は自分で守れということだらうな。」

渡部は自嘲ぎみに笑うと、朝倉たちの後について建物の中に入つて

行つた。

その後ろ姿を見て稜は何となく不安に思つた。もし、敵が攻めてきたとしたら、今は彼らの助けを借りるしかない。その彼らが・・・。そういう思想にたどり着けば当然の恐れだつたが、それでも彼はここでも杞憂と思い込んでしまつた。稜はプールの建物の中に入つていぐ。

「楽しみですねえ！」

本当に楽しそうな表情の朝倉。ただ単に変態なだけのような気もするが。

だけど、このときばかりは渡部と稜も同意せざるを得なかつた。彼らは海パン一丁で女子集団の到着を待つていた。

「じめん、待つた？」

まず最初の出てきたのは佐倉だつた。ビキニである。元気な彼女に似合つた明るい色とそのすらりとした体形がいやがおうにも目立つていた。

「・・・・・・・・・・」

続いてやや恥ずかしめに登場したのは山城。少し身長が小さく発育も良くない山城だつたが、それでもなかなか細く、その可愛さと合わせて相乗効果で威力を發揮していた。

そして、最後に出てきたのが小夜。

「うお！ 可愛いですね～！」

山城のかけた魔術が完ぺきだつたのか四肢についてはばれていないようだつた。

「うん、いいね。」

渡部も珍しく朝倉に同意する。確かに、その明らかに不釣り合いな四肢に目を向けなければ、今までの中では段違いに美しかつた。しかし、四肢も含めて小夜なのだからと稜はじつと見つめる。その視線に気づいたのか小夜は体を縮める。

「あっ、ええと・・・すまん。」

稜は思わず謝るが、じつとこちらを上目づかいで見ていることを考えれば何か言つて欲しげにしているのは確かなのだが、何を言えばいいのか分からぬ。と、稜は肘で脇を突かれた。見れば、佐倉が結構真剣な目で稜を見ていた。

「稜君！ 女の子はこういうとき自分の水着姿がどう映つてゐるのか気にかかるものなんだよ？ ちゃんと感想言つてあげなきや！」

初めて喋つたに久しい会話でなかなかフレンドリーに話しかけてくる佐倉にたじたじしながらも稜はできる限り笑顔を作つて言つ。

「いいんじやないか、それ。似合つてゐよ。」

「稜・・・・・。」

小夜は特に何も言わなかつたが、嬉しそうに立ち上がり稜の方に近寄ろうとして・・・・・。

爆風にさらわれた。

「これは・・・・！」

「呪術師。」

山城と渡部が臨戦態勢に入ろうとして決定的なミスに気づく。

「杖・・・・。」

「忘れた。」

「・・・・・・・・・・・・・。」

「おーほつほつほつ！ さすが、できそこないの魔術師ですこと。私たち、優秀な呪術師にはかないませんわね。」

プール場では最も高い飛び込み専用の板の上で傲慢に笑う少し年をとつた女性。その声が響き渡ると同時に様々な方向から似たような服の男女入り混じつた部隊が現れる。

「くつ！」

「まずい。杖がないと、魔力の媒介が上手くいかない。」

山城は悲しげに呟く。だが、取るには何人もの敵を倒す必要があり、とても今のメンバーではできないと思われた。

「そういえば、小夜？」

「ここ！」

気づけば、プールの中に落ちていたらしい。稜はほつと安心する。

「・・・。これは何の夢何でしょう？」

朝倉は呆然自失の体で稜に尋ねてくる。稜は返答に困った。

「これは夢なのです！ほら頬を思いつきり抓つて！きっと痛くないはず！」

渡部がフォローに入るが・・・。

「いや、痛いよ・・・。」

「抓り方が違う！もつともつと！」

「こうですか？…ひおおおおおおおお…痛すぎ・・・。」

「これはあなたがこうしたら痛いだらうなあとという想像をリアルに再現しているだけです！さあ、眠つて下さい。眠れば今日の悪夢は取り除かれるでしょう。」

「はい・・・。ではオヤスマニナサイ。」

「これ、何なの・・・？」

呆然と聞いてくる佐倉にも渡部は似たようなことを言つて強引に納得させた。

本当にその場で寝てしまつ朝倉と佐倉。それを見て稜は一言。

「お前、押し売りとか得意そうだな。」

「まったくありがたくない。」

本当に嬉しくなさそうに渡部は言つと、飛び込み台の上から見下してくる呪術師のボスらしい人間に對して話しかける。

「貴様らは「悪魔陣の創造主」の組織員か？」

「そうよ。だつたら何本氣出しちゃうわけ〜？」

「キモイ声で話すのは止める。」

空気が固まる。そして次の瞬間中年の女性はこめかみに怒りのマーケを浮かべながらそれでも笑顔を浮かべ、渡部を見る。

「キモイ声？あんたたちみたいな無能がそんなこと言つていいと思つてるわけ？」

「いいに決まつてるだろ？お前も大したことない無能みたいだし

な。」

中年の女性呪術師は容赦なかつた。

テヒリス、「ヒヒ 徒暁の宴」

女性はそれだけ叫ぶと、あとは何かをふつふつと唱え始める。それを見て、渡部は稜を押して、後ろに下がる。

「氣を付けて。魔術師は魔力から物を生み出

言葉を使って対象のものを利用する方法をとることが多い。つまりどこから攻撃が来てもおかしくない。」

その緊張感漂う言葉は秒は黒で詰く  
一麻積なら  
つもりだつたが、現実は想像を遥かに超えていた。

めきめきといつ音が聞こえたと同時に前方にあつたウォータースライダーがまるで生き物のように動きだしたのだ。

思つたのかい？」

だが、驚く稜とは裏腹に渡部は不敵に笑っていた。それを見て、何で笑っているんだ?と思つたとき、爆発が起つた。しかも、硝煙付き。あつという間に視界には何も映らなくなつていた。

## 「暴風の狂歌」

また女性魔術師の声が聞こえたと思うと同時に激しい風が起り、硝煙は消え去る。時間にして5秒がそこら。しかし、その空白は魔術師たちが体制を立て直すには十分だった。

卷之三

ガラス工芸店で小夜は使いしからぬ効かなかつたそれは今度は効いていた。燃やされた人間たちが次々と消えていく。呪術師達が体内に取り込んだ呪力が中和されたのだろう。

激流の矛

さらに山城が近くのプールの水を乱用し、地の利を生かして敵を倒していく。

飛び込み台の上にいた女性呪術師はいらいらとしながら、戦場を見ていた。最初は圧倒的な戦力差だった。しかも杖を持っていない。その有利さが逆に油断を生みだした。まさかあの程度の魔術師が「伏せ呪術用罠」を扱えるというのは完全に予想外。加えて次々と敵を狩つていく手際の良さ。明らかにこちらが不利になつていた。

・・・だが、ここでしくじれば次はなかつた。一度失敗したものは悪魔召喚の贅用に永遠に監獄で死を待たねばならない。彼女は身を震わせた。

もうなりふり構つてられない。

「「破壊の淵燐」！」

彼女は全身がだるくなるのを感じながらも止めない。彼女の口からは無数の「言葉」が溢れ出し、斜め上にある鉄骨へと吸い込まれていいく。

「・・・死になさい！」

彼女は一気に力を込めた。破壊音がして同時に鉄骨が外れ、落ちていく。続いて支えを失った他の鉄骨も。彼女は自身を呪術で守りながらその光景を見ながら、笑みを浮かべ、全貌が見えた次の瞬間。その笑みを凍らせた。

「ば・・・かな？何故あなたがこんなところに・・・？」

そこにいたのは秀麗な一人の少女。彼女は少女を知つていた。他の呪術師も同様にたじろぐ。

「まったく、あなたがこんなところで戦闘を行つとは失望です。ミス・マクロード。」

「「堅牢の魔術師」、エリス・エブアン！」

稜は自分の目の前に現れた少女を見ていた。彼女は瞬間にバリアを張つてプール施設にいる全員を助けた。

稜の横にいた渡部は驚いたようで困惑したような声で目の前の少女に話しかけていた。

「エリス様、何故このよつなところに？」

「派遣されたのです。これは仕事なのです。」

エリスは短く答えると飛び込み台の上で驚愕する女性魔術師に冷ややかな目線を浴びせる。

「さて、この場で多くの被害者を出したくなれば退きなさい。それができぬようなら全員まとめて消してあげますが？」

「…………！」

マクロードは唇を引き締める。どう見ても不利は明らか。誰もが呪術師側の負けを確信した。しかし……、マクロードは突然高笑いし始めた。

「おーほっほっほっ！ まったくあなたが「銀の夜」本部守護隊の人だとは聞いて笑わせますわ！」

「まったく……。気でも触れたのですか？」

「危ない！ 後ろ！」

山城の悲鳴にも似た初めての大声。

とつさにエリスは前方いっぱいにシールドを張つて「しまつた」という顔をした。

エリスの前方を飛ぶ少年。それは「悪魔陣の創造主」が誇る切り込み隊長、レイル・イバンだつた。

レイルはマクロードのように何も唱えず、剣一つで切りかかつた。その剣はエリスが展開するシールドにぶつかって弾かれるはずだつた。しかし、その剣はシールドを紙でも破るように簡単に破ると、そのままエリスに切りかかつたのだ。寸前にエリスは避けたが剣風で腕が切れていた。

「くっ、あなたまで来ましたか……。」

エリスは舌打ちしたくなつた。レイルはうつとりとした眼でエリスを見つめ、そしてまるで劇の主人公のように大仰な身振りでエリスに話しかけてきた。

「やあ、僕の愛しのエリス。ああ、この瞬間を僕はどれほど待ち望んだことか。君のその麗しい声、瞳、仕草、雰囲気、容貌……。ううん、いい！ やっぱり君は僕とともににあるべきだ！」

「お断りです。」

レイルの口説き文句は瞬殺される。だが、レイルにめげた様子はない。ただ・・・、どことなく殺氣が生まれた氣がするのは不気味だつたが。

「そうかそうか、君はいつも僕の事を受け入れてくれない。誰か好きな人がいるのかい？そこの男？」

渡部が指さされる。しかし、渡部は首を振る。稜は妙に思う。だが、原因が分からぬ。

「じゃあそこの見るからに眠そうでやる気なさそうな男かい？」確かにやる気のない顔をしているが。稜は複雑な顔になる。と、レイルは何を思つたか、顔を赤くして怒り始めた。

「そこの貧民！」ときがエリスと！？・・・許せないね・・・。殺す！」

レイルが稜に向つて走り出す。しかし、それは途中で水を浴び、止まつた。

「ふうん、僕にこんな冷たい仕打ちをするなんて雑魚のくせにやつてくれるね。」

レイルは愉快そうに先ほどまで残党を倒していく、ようやく戦闘に入ってきた山城を見た。

「あなたも私たちと変わらないくせに。」

山城は冷たく言い返す。

「ふん、僕が何の力もないことを知つているのか？」

「もちろん・・・。かなり有名。中性力によつて体を構成していくながら、その呪力を浴びすぎて禍々しい力を持つた「悪魔の剣」を使いこなすことができた天才。」

「ありがとう。」

山城の言葉に恭しく頭を下げる。先ほどまでの態度とは違う。

「だったら、分かつてゐるよね？僕を怒らせたらどうなるかっていうのがさあー！」

やつぱり怒つていた。

「「冷水の陣」。」

山城の周りに謎の紋様が浮かび上がり、それから水が溢れ出す。そして、それらは意志を持つたように動き出し、向かってくるレイルを迎えた討ちにしていた。

「無駄だーーー！」

鋭い振りがひと振りで山城の魔術は崩れ去った。

「なら、僕はどうかな？」「熱の焰」！「

渡部は山城と交代し、魔術を放つ。周囲は極端に暑くなり、加えて炎が周りをたぎっていた。

「君のその剣はよく切れるのかもしれないが、僕のこの魔術なら・・・。

「なんだ、そういうものは効かないぜ。」

そう言つと、レイルは振り下ろした。その瞬間熱波が巻き起こり、気づけば、もう魔術は吹き飛んでいた。

「さて、覚悟を決めてもらおうか。」

レイルは不敵に笑みを浮かべる。

「「聖結界」。」

「おつと！」

「させません、・・・ミス・マクロードも同様です。」

さすがにエリスの視野は広かつた。守備ついでにもう一方の敵の動きも止める。

「こんなちんけな盾で僕を防ぎきれるとでも思つていいのかい？」  
レイルは剣を振り上げ、魔術ごと壊そうする。

「馬鹿な・・・？」

壊れなかつた。さらにレイルの剣にわずかにではあるが傷もつけた。

「あなたは私の一つ名が「堅牢の魔術師」であることを忘れてるんですか？」「絶壁」には遠く及ばない守備力ではありますが、彼とは違い私には「重複詠唱」ができるのに加えて呪力を破壊する「宇宙防壁」を初期装備していますから、あなたのよつた剣に頼つた戦い方では私を倒すことはできませんよ？」

「さすが、「堅牢」……だけじゃこがまたいいんだよなあ……。  
、エリスちゃん。」

うつとりした様子で呟くレイルにエリスはため息をついて言つ。

「本当に死んでください。」

エリスは一言で戯言を切り捨てる。その言葉を聞いてレイルは身をくねらせて悶えたあと、残酷な笑みを浮かべた。

「本当に残念……。もつ少し可愛げあれば助けてあげたのにさあ！」

稜は自分が何を見ているのか分からなかつた。相手はさつきからずつといふレイルなのに剣さばきがそもそも違つた。

「ほらほらー、どうしたどうした？」

「ぐつ！」

剣風でエリスの腕に切り傷ができる。すでに彼女のシールドも修復が追い付いてなかつた。

「上にどれだけ重ねたつて結局は魔力で構成された盾。壊すのは簡単さあ。」

エリスは自分の認識の甘さに歯噛みしていた。

エリスは、レイルが剣の攻撃力を封じられれば、自動的に勝利できると思い込んでいた。しかし、実際は本氣を出させ、自分の命も危なくなつてゐる。

（「堅牢」が、このままでは……。）

彼女は自らの二つ名に懸けて魔術を唱えだす。

「「虚無の空間」！」

まず、その詠唱が終わつた時点で目の前に真つ黒な空間が浮かび上がり、そしてレイルを猛烈な勢いで吸い込み始めたのだ。

「へえ、さすがはその歳で本隊に入つてだけはあるけど、またまた残念！少し力が足りないね。」

それだけ言つと、レイルは何と真つ黒な空間に自ら進んだのである。だが、吸い込まれる直前に彼は剣を振るう。空間は消え去つていた。

「僕の剣は魔力で構成された全てを切れるんだ。それが異空間の入

口であつてもね。」

「くつ・・・・！」

エリスはすでに立てなくなつていた。魔力の使いすぎとレイルに与えられた傷が原因だつた。

「炎上の霸主」！」

渡部は魔術を詠唱して、エリスにレイルを近づけまいとするが簡単に切られる。

近くではエリスのシールドが消え去り自由になつたマクロードが山城と対峙していた。

稜は何もできない自分を悔いていた。朝倉は近くで寝ていて、佐倉もそれに寄り添つて寝ている。正確には気絶しているだけだが。と、ここで稜は背後から聞こえた凜とした声を聞いた。

「これは何事じや？あまり五月蠅くしすぎて、妾の楽しみを邪魔するのであれば許さんが。」

稜は振り返る。そこにいたのは小夜のはずなのに、まったく小夜とは違う別格の存在。小夜の四肢は怪しく輝き腕に刻まれていた文字たちが躍動していた。そして感じられるのは禍々しい邪氣、そして呪力。その場にいる全員が金縛りにでもあつたかのように固まつていた。

「ふむ、妾の同胞が多いの・・・。だが、今回は宿主のたつての希望で妾は魔術師側に加担させてもらひうどよ。さあ、かかつてこい、小さき人間よ。」

「いいね・・・。その殺氣。最高だあ！」

レイルは顔を狂気に歪ませながら向かっていく。だが・・・。

「勇気だけは認めてやうづ。だが、その剣はもとは妾の持ち物。その剣を取り上げられたくねば、失せろ！」

小夜の中にいる何かはそれだけ言う。まったく動かない。だが、レイルはそれだけであるで悪夢でも見たかのように呆然自失の体になり、動かなくなる。

小夜は稜の後ろから前に進み出て、マクロードを見た。マクロード

はそれだけで蛇に睨まれた蛙のように怯え、逃げる。レイルも逃げ出したらしくプールは何事もなかつたかのよひこじんとする。

小夜の中の何かは稜の方に振り返り、さつきとは打つて変わつて優しい母のような顔をして言つてきた。

「すまぬな、稜。妾が目覚めればこのよひの悲惨な事態にはならんで済んだのに・・・。本当にすまぬ。」

「いや、別に俺は・・・。」

本当は少し楽しみにしていたが稜は顔の前で手を左右に振つて違うというジエスチャ―をしようとするが、小夜の中の何かはそれを見て一層寂しそうに言つ。

「妾が「破壊」ではなく「再生」ならば良かったのにな・・・。妾はこの力で後悔し続けてある。」

場はしんとする。だが、稜はそんな寂しそうする小夜の中の何かを放つておけなかつた。

「誰かは知らないけど、君のおかげで助かつたからそんな風に謝らないでほしい。・・・ええと、ありがとう・・・。名前は?」

小夜の中の何かは小夜の顔でにこりと優しく微笑むと、稜に近づき耳元でこつ囁いた。

「妾の名はルシファー。助けた礼は憑き主を遊んでやる」と。以上じや。」

「ルシファー?」

だが、返事はなく、稜のすぐ近くにはきょとんとした顔で立つ小夜がいた。すでにあの圧倒的な存在感は失われていた。

「ええと、皆が呪術師に襲われて、それで今気がついたんだけど、何かあったの?」

「いや、別に。」

稜は横に首を振る。屋根は崩壊しつのまに野外になつていたプールの近くで稜は呟いた。

「・・・寒いな。」

夏でもパンツ一丁は寒いものである。

「「堅牢」はどんな感じだった?」

「予想通り「悪魔剣の使い手」と遭遇。現地スパイによれば撃退したとか。」

エドワードは感嘆したように声を上げる。彼の目にはフードで目を隠した男がいた。

「予知の魔術師」、キース・キッド。魔術師集団きつての特殊能力者である彼は同時に「銀の夜」の参謀的位置にあった。

「で、お前の眼にはこれからがどう映っている?」

「予定は狂っていない。すでに「悪魔陣の創造主」は動き出している。お前の計画もついに中盤に突入した。」

その報告を聞いたエドワードはにやっと笑った。

「そうか。」

返答はそれだけだったが、彼の声音は楽しげだった。

その頃、ヨーロッパ某所にある「悪魔陣の創造主」の本拠地では戦闘準備が整えられ、今戦闘員が広大な広場に集められていた。その数三千。世界各地から集められた精銳だった。

彼らより一段高い場所に白銀の長髪をなびかせた若い男が昇り、三千の兵に演説を始めた。

「勇敢なる呪術師の諸君! 我々は今最高のチャンスを目の前にしている! それは長年の宿敵だった「銀の夜」を倒せるというものだ! もちろん先に何が待ち受けけるかは分からん! だが、我々には呪術の神ルシファー様がついている限り負けはない! 進め! 立ち止まるな! 銀色の曇った夜は終わり、我々は世界を新たな場所へ連れていいく!」

大歓声が響き渡る。男はそれを見ながら口端をひきつらせた。正確には彼なりに笑つたのだが。

「さあ、見せてもらおうか、エドワード。私の懐かしき旧友よ。」

彼は咳く。それは大歓声にまぎれ、空へと吸い込まれていった。



## 第一章（後書き）

いかがでしたでしょうか？何か文章について意見や感想がありまし  
たらお願ひします。

## 第二章 少年少女のシンボル

「今日からうちのクラスの一員になる転校生を紹介するぞ。」

「あー、可憐な彼女が田一ロジペの下に立つていい。」  
ちばやわめく。

あと 何でもそれまでは三口ノの方は住んでたらいいぞ  
「すうい。」

帰国子女かよ。

などと感嘆の声が大きくなつてゐる。だが、そんなクラスの雰囲気と逆行して、つまらなさそうにしている人間が四人。まずは久野稜。彼の場合は元々の顔がつまらなさうなのだが、今はそれに加えてすでに転校生がだれであるかを知つてゐることもあつた。

そして、渡部宗君と山城憐。彼らもまた転校生が誰であるかを知っていた。

「」も、「」も。

ドアを開け入ってきたのは・・・、エリス・エヴァン

教室は熱狂の渦に巻き込まれる。エリスは美人だ。特に男のテンションは半端なかつた。

「じゃあ自己紹介を。

「はい、私の名前はエリス・エブランです。まだぜんぜん日本のことを知らないんですけど、よろしくお願ひします。私のことはエリスと呼んで下されば結構です。」

「エリスちゃん！」

早速男たちの大合唱。だが、女子の心証もさして悪くはなかつたらしい。それどころか礼儀正しいエリスにやや感心しているらしかつ

た。

「さて、エリスの席はあそこな。」

そう言つて担任は稜の横の席を指差した。

「はい。」

エリスは稜の横へ来て、稜にしか聞こえない声で言つてきた。

「よろしく・・・、要監視者、久野稜・・・。」

ぞつとするような低く冷たい声だつた。

そうこんなことになつたのはあのプールでの戦いの後だつた・・・。

すでに呪術師達は撤退したあとであつたため、彼らはひとりあえずそこから離れた。

そして、プールから一番近かつた渡部の家に立ち寄つた。そこで稜は疲れを癒すために風呂に入ることにしたのだが、何の手違いか。最悪の悲劇が起つた。

「お風呂、お風呂」

「はっ？」

稜は耳を疑つた。風呂につかっていた稜は脱衣場からつまづきとしだ声が聞こえ、しかも女子の声。稜は激しく焦つた。すぐに彼は「もう入つていい。」と言おうとしたが、気づくのが遅かつたのに加え、頭が真つ白になつて判断が遅れたのが仇となつた。扉が開き現れたのは、エリスだつたのである。

一瞬の空白が訪れ・・・。

「きやあああああ！」

悲鳴が響き渡つた。だが、悲鳴だけでそれは終わらない。何を思つたか、エリスはタオルで必死に体を隠しながら半泣きの声でしかし殺氣だけはこめながら尋ねてきたのである。

「な、何であなたが・・・？」

「い、いや・・・お風呂に入つてて・・・。」

「何故それを先に言つてくれないんです！？」

「いや、言つ前に入つてきたから・・・。」

「嘘でしょ？偶然を裝つて私の裸見たかつたんでしょ？」

「そんなわけ……。」

「黙れ！！！」

「ひっ！？」

稜は思わず体を縮める。それほどまでにエリスは怖くなつていた。

「宗君、憐が信用していいて、あの訳の分からない女があなたの前では大人しいから私も少しは信頼してていたのに……。」

訳の分からぬ女とは小夜のこと。エリス登場時にはプールの上で

が負けそうになつたレイルともう一人を威圧感だけで退けたのだ。訳が分からぬと言われるのも仕方なかつた。

とにかくそのころ稜は真剣に自分の命について心配し始めていた。

「ねえ？あなたはどうちがいいですか？異空間に放り出さるが、そこ二三枚のノート、どうせ二段つづいてるが、

「ええと……。

どちらにしても命の保証はない。

このめんたるい

完全に氣迫負け。

- 10 -

その様子を見ていたエリスは何か品定めをするよ、ほほえを見ていたがやがてふいと顔を背けて小さな声で呟いた。

「今田はひうあえずなかつたことにしておきます。・・・次やれば・・・、本当に殺しますから。要監視者認定です。榮えある・・・ね。」

そう言つとエリスは鋭い眼光を残し、脱衣場に帰つて行つた。稜はそれを見て、ただ震えるばかりだった。

「まったく学校まで変態と一緒にとは残念無念。これからは学校生

活が心配です。」

昼休みの屋上いつもの六人にエリスが加わっていた。

「いやー、エリスちゃんは可愛い！芸能人ですよね？」

朝倉は下心見え見えの笑顔でエリスに話しかける。昨日、海パン一丁で寝ていた男の行動とはとても思えないが、稜は何も言わない。ところが、朝倉の行動に拗ねたように刺々しい言葉を放った人間がいた。

「智也！何でそんなにデレデレしてるの？かつて悪いよ。」

佐倉沙希であった。朝倉は慌てて佐倉に弁解する。

「そ、そんなわけないです！デレデレなんて・・・。」

「私と居る時はつまんなさそうなくせに・・・。」

いつのまに一緒にいたんだ？という疑問を稜は持つが、重い雰囲気の中でとても言えない。

「それは勘違いです！僕は・・・。」

だが、言えない。稜にはなんとなく分かった。誰にでも敬語を使うこの男の気持ちが。

たぶん、「僕が好きなのは佐倉さんです！」とか言いたいのだろうが、そんなことを言つても今の状態ではとてもじゃないが受け入れてもらえないと思われた。

「ふん、何？何も言えないの？だつたら誤解でもなんでもないでしょ？・・・もう行く。」

佐倉は鼻息荒く屋上を出て行つた。それを見送つた渡部は氣遣うように朝倉を見る。そして励ます。

「彼女は誤解しているんだな。僕たちが誤解を解いてくるよ・・・。」

「いや、いいです・・・。」

そう言つた朝倉は寂しげだつた。だが、彼は気丈に振舞うことじたのか辛そうな笑みを浮かべて言つた。

「そんなことしてもらいう必要はないです。元をたどれば僕がエリスちゃんにデレデレしていたのが原因なのですから。・・・それに自

分の事を人に頼るのは一番卑怯だと思います。」

その言葉は朝倉の本心だと稜は思つた。そして、自然と言葉が口をついて出でていた。

「そうか・・・、じゃあ頑張れ。」

「はい。」

朝倉は力強く返事すると屋上を出て行つた。それを見送つた後、今まで一度も口を開かなかつた女子たちがしみじみとした口調で感想を述べ始めていた。

「男の子つて意外と変わるんだね・・・。」

小夜が言うと、山城も同意して

「日々精進。」

朝倉の過去の姿を知らないエリスは頭に？マークを浮かべながらも、彼女たちのいう意味が分かつたらしく神妙な顔つきになる。

「ねえ・・・、朝倉君がどうなつてるか見に行かない？」

そう言つたのは小夜だつた。渡部はすぐにそれに同意し、山城もそれ繼續く。

「いいのか？一人きりにした方が・・・。」

稜は止めようとするが、

「私も付いていきます。少し気になりますし。」

エリスがそんなことを言つのはかなり意外だつた。稜は虚を突かれたように周りを見渡し、皆の眼を見て、稜は言つた。

「俺も行くよ。」

皆の眼には仲間を心配する気持ちが入つていていたからだ。

学校から近い街中で稜を始めとする五人は口論しながら歩く朝倉と佐倉を見つけた。

だが、五人故に気づかれる可能性があるので近づけない。会話の内容も聞こえない。

そんなときだつた。

「私に任せて下さい。どれだけ近づいてもばれないような魔術をか

けますので。・・・「光輝のカーテン」。」

それだけ言つと、エリスはさつさと歩きだした。他の四人は慌ててついていく。そしてエリスは一人の一人メートルほど前まで来たところで彼らと同じスピードで歩きだした。

「な、何でばれないんだ？」

稜は相手から見えないと分かつても小声で尋ねてみる。それに山城が答えてくれた。

「これは光の乱反射で私たちを見えなくする魔術。だから。」

「ちなみに声は通るから音量は抑えたほうがいい。」

渡部が付け加える。

「ああ、分かつた！バスケばっかりで何も知らない私を上手くおだてて変なことするきだつたんでしょう！」

「ち、違います！そんなつもりじゃ・・・。」

「けど、エリスちゃん、色氣あるもんね？私なんかよりずつと！」

「そんなつもりでエリスちゃんを見ていたわけでは・・・。」

近くで聞けば聞くほど朝倉はかわいそつた。佐倉はまるで話を聞かず、ひたすら言いたい事を言つていて。いつまでも平行線だな・・・、と稜は思つた。

しかし、エリスは冷めた目で一人を見ていた。何故だらうと思つ前にまた会話が再開される。

「もう、いい加減にしたら？何のつもりか知らないけど私疲れたの。」

「そう言つと佐倉は歩みを速めた。朝倉は呆然と立つてゐる。」

「・・・もう帰りましょ。」

エリスが突然そんなことを言い始めた。幻影を作る魔術まで張つておいて、彼女は急にやる気をなくして帰つて行つた。

「どうするの？」

小夜は稜に尋ねてくる。稜は暗澹とした気持で一つの結論を言つしかなかつた。

「帰ろう・・・。」

次の昼休み。屋上には朝倉も佐倉もこなかつた。その景色を見た

エリスは突然誰に語つているのか分からぬ感じで言い始めた。

「私は昨日あの一人の喧嘩の様子を見ましたけど、佐倉ちゃんが自分のコンプレックスに、或いは自分に自信がなくて朝倉君に当たつているようにしか見えませんでした。朝倉君に非はあつたとしてもあれはさすがに看過できません。朝倉君は彼女のストレス発散のはけ口にしかなつてなかつたです。あれは正しい交際の仕方と言えるのでしようか？」

「あの二人つて交際してたのか？」

稜が驚いたように尋ねる。エリスはそんなことも知らなかつたのかという感じで稜を見ると、さらに繋げた。

「私思いました。あんな付き合い方しかできない二人なんて一緒にいない方がいいんじゃないかな……つて。」

「それは言いすぎじゃない？あの日はたまたまかも知れないし。」

小夜は反論するが、エリスは首を振る。

「普段はそんな感じではないのかもしれないけど、やつぱりふとした拍子に出ちやうものなんですよ。……私、朝倉君に告白しようつと思ひます。」

「はつ？」

渡部は自宅に強盗が入つた瞬間でも見たかのように大口を開けて呆然としている。

「何ですか？その反応。……私別に朝倉君の事嫌いじゃありませんし。何よりも傷ついた彼を放つておくなんて、私にはとても……」

。

稜はその様子に何故だか違和感を覚える。あまりにも突然すぎはないだろうか？稜は周りを見るが渡部、小夜は自分と同じように驚いている。だが、山城が何かに気づいたような顔をしているので稜は山城の近くに行つて尋ねてみる。

「おい、憐。何でエリスはあんな風に言つているんだ？」

「いた。」

彼女はそれだけ言った。再び稜の中に疑問が生まれた。

「「いた」って何が？」

「朝倉君。」

「！」

なるほど。確かにさつきまでのエリスはどこか人に聽かせるような話し方だった。それは稜たちにではなく屋上に入口で聞いていた朝倉へ向けてだつたのだ。

「つて、まずいんじゃないのか？あんなこと言つて……。」

稜は顔色を曇らせるが、山城は平然としている。山城は稜の表情を見て、少しほほ笑んだような感じで言つ。

「問題ない。あれは朝倉君への挑戦状。朝倉君がエリスちゃんをとればそこまで彼は全てを失うことになる。けれど、もしあれでも朝倉君の気持ちが動かないのなら……。」

「そうか。けど、佐倉があんな調子じゃあ……。」

「大丈夫。エリスは彼女にも聞かせていた。……あそこ。」

山城が指さした方には屋上の入口で朝倉と話す佐倉がいた。なるほど、二人に聞かせていたのだ。

朝倉は佐倉に自分の気持ちをはつきり示すことができるし、佐倉は朝倉の正式な気持ちを聞くことができる。  
と、二人は階段を降りて行つた。稜はそんな二人の姿を嬉しそうに見ていた……。

さらにその翌日。明日は休日だという学校の日。教室でぼんやりとしていた稜は朝倉に肩を叩かれ、強引に話し相手になつていた。

「それでですね、沙希と来たらもう可愛くて……。また明日も遊びに行こうっていう話になつてるわけですよー。」

「それは良かつたな……。」

「そこで、エリスちゃんにはもう渡したのですが、これを……。」

「なんだ、これ？」

それは何かのチケットだった。見ると、最近できたばかりのアニメーションパークの名前が。そう遊園地の入場券だった。

「どうしてお前がこんなもの・・・？」

稜は怪訝になつて尋ねるが、朝倉は軽く笑い、稜の背中を一度叩いて言った。

「偶然手にいれたんです。」

「お前が使えよ・・・。」

「いえ、それ明日が期限切れの日でして。明日までに行かないとだめなんですが、明日は沙希たつての希望で水族館なのです！」

「そういうことか・・・。」

「どうか、他の人間には渡したのかと尋ねた稜は朝倉が言いにくそうにして結局言つた言葉に結構愕然ときた。

「実はそれ一枚しかなくて・・・。エリスさんは僕たちの中を直接的に取り持つてくれた功労者ですし、あと一枚はとなると、僕の親友に渡すしか・・・。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「で、ではまた月曜日ー。」

そう言つと朝倉はすでに放課後を迎えていた教室から、学校から出ていく。朝倉を見送りなら、稜は頭を抱えていた。

（何でよりもよつて一枚。しかも、俺にいい印象を持つていないエリスと二人きりかよ・・・。しかもこれを知つたらあとの三人は何と言つうか・・・。）

「ねえ。」

「お、おう・・・。」

稜の前に立つたのはまさにそのエリスだった。

「こんなものもらつたんですけど、一緒に行きますか？」

「お、おい。稜がエリスに遊園地に行かないかつて誘われてたぞ！」「まじかよ・・・。」

「何であいつなんだ？」

結構人が残つていた教室でざわめきが起きる。

それは渡部、山城、そして小夜も例外ではなかつた。

まだ、波乱は起きたばかりだつたということに彼が気づくのはまだ後だつた……。

その頃、レイルは剣を研ぎながら、一人の人間の話に耳を傾けていた。

「というわけで、君の大好きなエリスちゃんはどこぞの馬の骨とも分からぬ久野稜という少年とともに遊園地に行くことが決定したわけだ。」

男はふざけた調子で言つ。レイルはその男を殺したくなるのを必死に抑えて、冷静を装つた。レイルがこの男に勝てる確率は何千分の一定程度。それほどまでにレイルの前にいる男は強かつた。

（「幻想」の呪術師・・・、フラン。何でこんなどこかの戦線なら確實に大将級の人間が、こんなところに・・・？）

「ふむ、左遷だよ、さ・せ・ん。僕の力があまりにも強いんですね。危惧したというより、サガムのお爺さんが臆病風を吹かして僕を遠くへやつただけなんだけどね。」

レイルは自分の心が読まれたという衝撃よりも「悪魔陣の創造主」の名将と謳われるサガム・バーンガードが使いきれないという事に対する驚きの方が大きかつた。

「ふん、まああながちただの左遷つていうわけじゃなさうだけどね。」

「どういう意味？」

「もうすぐここに例の報告書にあつた奴を守護するために「銀の夜」の数人が来るらしいよ。その筆頭は例の祭具を守りし、魔術師「審問の魔術師」らしいね。」

「審問」の一文字を聞いた瞬間レイルの頭は真っ白になつた。

「何だつて「審問」が・・・。」

「銀の夜」が保持する伝説の祭具を守るために作られたと言われる四人の最強の守護隊。その守護隊の筆頭が「審問」だつた。

「くくく・・・おもしろいねえ。かたや、人間でありながら「悪魔剣の使い手」と恐れられるレイル君と誰にも支配されない強力な力を持った僕。かたや、本部守護隊の「堅牢」と祭具守護隊の「審問」。加えて、我らが組織の永遠の盟主と言われるファウストの四肢かもしれない四肢を持つ少女に誰かさんの夢で出てきた彼女を守るために「炎」と「水」。舞台は整ったんじゃない?」

「どうだか・・・。」

レイルは返答を濁したが、それでも彼でも分かつていた。もうすぐ大きな戦が始まると。

## 第四章 初めての恋心と強大な敵

「フレイド様、長期の旅大変ご苦労様です。大変せまくはござりますが宿屋を近くに用意していきますのでこちらに。」

エリスは緊張していた。彼女の直属の上司であり、「銀の夜」の現頭首を前にも起こらなかつた緊張は今、この瞬間に起きていた。といつてもやむをえないかもしれない。

「銀の夜」においては異色の存在。そしてあまりにも強大な存在。それが彼だつたからだ。今でも膨大な魔力を放つてゐる。これが牙を向ければどうなるかは明白だつたし、一度話したことのある祭具守護隊の一人、「奏楽の魔術師」は「審問」についてこう語つていた。

「「審問」はね、私たちの中でも異質な存在なのよ。何せ、何百年、果ては「銀の夜」創設時にはもういたつて言われてるくらいの伝説的な人物でさ、魔力もケタ違いで、「審問」以外の祭具守護隊が全員でかかつてもあいつには勝てないかもしれない。もちろん、表の人間が全員でやつてもね。・・・それなのに、彼は上を狙わずに裏の仕事に就いてる。・・・

不気味じやない？」

「奏楽」は守護隊の中でも最も親しみやすく、明るかつた女性だつたが、そんな彼女ですら若干の恐怖を浮かべていたのは意外だつた。ちなみに、祭具守護隊の人間は祭具の近くから離れるには頭首の命令が必要であり、必然的に地下深くにある祭具に縛られるため、祭具守護隊の人間、あるいはそれに配属された人間は自分たちを「裏の人間」と呼び、本部守護隊や遊撃隊を「表の人間」と呼んでいた。

「そう畏まらんでもよい。別に儂はそなたを怖がらせるために来たのではないのでな。」

深くしわがれた声で「審問」、フレイドは言った。

「すいません、伝説の方を目にしたのでつい・・・」「よい。」

だが、意外といい人そうだった。確かに無愛想だが、目も合わせず話さないわけではなく

それなりに気を使ってくれてもいる。

「では、こちらへ。」

エリスは空間転移の呪文を使用し、魔術師しか泊まれないホテルへと繋げ、案内した。

「何で私は誘ってくれなかつたの？」

小夜はふくれつ面で稜に尋ねてくる。

「いや、朝倉がすでに配り終えてたから・・・。」

「僕らだけ置いていくなんて君は何も思わなかつたのかい？」

「・・・そりや、思つたけど・・・。」

「エリスと二人だけが良かつた？」

「違う！」

稜は三人から愚痴を言われ続けていた。もちろん、論題は「何故、稜はエリスと二人だけで遊園地に行こうとしたのか」である。これについては三者三様の表情を見せていた。まず、小夜はどこかむかついたような顔。

渡部は一人だけで行こうとしたことに対する落胆。山城は相変わらずのなんとも言えない無表情だ。

「だから、皆で一緒に行こう！ってチケットまで用意したんだろ！？」

？」

稜は軽くなりすぎた財布を思い出しながら、言つ。

「まあ、これはもらつておくけど・・・。」

三人の手にはそれぞれチケット。

「ただいま！」

エリスが部屋に入つてくる。ここは渡部の部屋。一番学校に近く、それなりに広く、しかも一人暮らしなので他の四人の家も近いので

ここに集まるようになつていて。

「あれ、皆どうしたんです？そんな顔して？」

そして、三人の手にあるチケットを見て、笑顔だった表情を凍らせた。そして、稜に向きながる。稜は意味もなく背筋が凍る思いがした。

「・・・なんだよ？」

「いいえ？ ただ何故皆さんのに遊園地のチケット・・・それも私たちの行先と同じ場所のチケットがあるのかなあと思いまして。」

「それがな・・・。」

「ずるいから。私たちだつて朝倉君たちをエリスちゃんと同じくらい心配したのに、少し最後の決定打加えたくらいでチケット貰つて・・・。」

「小夜さん・・・？ あなたは何て理不尽な言いがかりを・・・。」

「言つんです？」 と言いかけてエリスは止めてさつき小夜が言つた言葉を思い出し、そして違和感を見出した。

（小夜さんは遊園地のチケットを貰えなかつたくらいでふてくされるよつな子どもではない。それなら、最初のずるいという意味は・・・。）

エリスはにやりと笑う。そして、少しエリスの様子に怯える小夜に対してこう言つた。

「それだつたら。」

「「」、「」めん・・・。いろいろ身支度に時間かかっちゃつて・・・。」

さすがに暑いからか、腕が結構出る半袖に足が結構出るニースカートを履いている。それでも誰も彼女の四肢について注目しないのは小夜が仲の良い「水鏡の魔術師」山城憐が再び偽装の魔術でもかけたのだろう。

二人は合流すると、すぐに歩き出す。他にはもう誰も来ないからだ。何故こうなつたのかと言えば、やはり昨日のエリスの発案が原因だ

ろひ。彼女は昨日の席でこう言い放ったのだ。

「それだったら、小夜さんと稜君が一緒に行けば良いんです。それに今思い出したんですけど、私明日仕事が入つてて……。「銀の夜」のね。宗君と憐も同行してもらうので明日は一人で行ってきてください。」

そうやって押し切られたのだ。それでもエリスに比べれば小夜の方が気心も知れてていやすいといえばいやすかつたが。

「そういえば、今日行くところつて何があるの？」

小夜は話題提起のつもりかそのようなことを尋ねてくる。

稜もそれが気になってそれについては調べてあつたから答えられた。

「確かに、結構大きい規模のジェットコースターが……。」「

「タイプーンだよね？」

「あ、うん。それ。つて何で知ってるんだ……？」

「えっ、い、いやそれはニュースでやつてたから！」

「そうなのか？で、あとは国内最大級の観覧車も……、確かに回る時間が……。」「

「15分だよね。」「

「それもニュースで見たのか？」

「ええと……。」「

稜は一度溜息をつくと、笑つた。

「調べてきたんだろ？」

「ええと、うん。何乗ろうかなあつて思つて……。」「

「じゃあ今日は俺が小夜にエスコートしてもらわないとな。」

そう茶化すと小夜は可愛い笑顔を浮かべて頷いた。

休日の始まりだからか、それとも夏休みが始まつたからなのか、遊園地にはたくさん的人がいた。それでも、朝倉からもらつたチケットは特別なものだつたのか、ほとんど待ち時間なしで乗れた。今までには遊園地内の半数近いアトラクションを制覇していた。昼からもそれなりに数をこなしていたが、小夜はあるアトラクショ

ンの前で顔をひきつらせ立ち止まつた。そこはこの遊園地に来てから何度も通り入ろうとしては思いとどまつて止めたアトラクションだった。そのアトラクションの名は「恐怖！廃病院でうるつく怨念達！」おどおどしい音楽と、建物の外観だけでもう怖いのに中からは叫び声が聞こえる。

「…………」

小夜は青白い顔をして、見ている。

稜は「別にこれにしなくてもいいだろ？」的な事を言おうとして小夜に袖をひっぱられ、気づけば中に入つていた。だが、かなり長い構造らしく「気分が悪くなつた方はここから出てください」の表示が点々としている。それを見ただけで普段はあまり怖がらない稜でも恐怖心を煽られた。

それでいて中は当然だがかなり暗い。と、

「うわあー！……」

奇声をあげていきなり横から幽霊役の人が出てくる。

「ぎゅやうああー！……」

だが、こつちも負けていない。これが本当に人の声なのかと思つほどだ。

それからというもの小夜はものすごい勢いで稜にひつひついて来た。稜的には頼られてる感じがしてとても嬉しいのだ。

ようやく一段落したところで、稜は話しかけた。

「なあ、小夜。」

「何？」

「小夜つてお化け怖いのか？」

「当たり前でしょ？人智を超えた存在なのよー？」

まあ、このお化け屋敷の方は人智を超えていないと思うが。

「別にそんなに怖がることないんじやないか？」

「な、何で？」

「一人じゃないから。頼りないかもしれないが俺がいる。ほら、腕組まずに手を組め。そうすると、お互いの温かみを感じていい。」

「うん・・・・・。」

小夜は自分の手を稜の手と繋ぐ。小夜の手はまるで男のようになつてついていたが、稜はそれが小夜の手のような気がして強く握った。それから、やつぱりお化けに恐怖しつつも、稜と手をつないだ安全感からかものすごい悲鳴は無くなつた。

だが、小夜と稜がお化け屋敷からでた瞬間、信じられない事態が目の前で起きていた。あれだけいた人は皆地面に伏し、数人の人影が対峙していたのだ。

「宗君、憐、エリス！？」

三人はその声にちらつと横目で稜を見て苦笑いすると、再び前を向いた。彼らの視線の先には前にプールのときに襲ってきたレイルとまだ若い二十代くらいの男の二人。

「エリスちゃんが、僕の目の前に現れるときはいつも敵としてだね。・。本当に悲しいよ。」

レイルの声が空しく響く。

「ふん、僕を敵とするにはあまりに貧弱な陣だね。で、どれだい？ 前に君を威圧感だけで撤退させたのは？」

若い男の質問にレイルは小夜の方を向く。男はうん？といつ本当に不思議そうな顔で再びレイルに尋ねる。

「本当に彼女なのか？全然殺氣を感じない。」

「騙されてはいけないぞ。あいつは真剣に放たれる呪力だけで殺されるそうになるくらいだからな。」

若い男はじつと小夜を見て、小夜の四肢を見て、納得したように頷き、いきなり小夜に話し始めた。

「僕の名前はケビン・ドラント。よろしくね。」

「よ、よろしく・・・。」

「一つ質問いいかな？」

「は、はい・・・。」

「その腕と足、最初からそんなものなの？」

「そうですけど・・・。」

「そつか・・・。」

ケビンはただ笑っていた。そこから動く様子もない。だが、小夜とケビンの間に入るよう渡部が入ってきて、その認識が間違っていたことを知る。

「「遮断の熱波」！」

渡部の目の前に炎の盾。しかし、その盾は簡単に破られ・・・。

「どかん！・・・なんてね。」

ケビンは渡部に鋭い一撃を放てる。それだけだった。渡部は崩れ落ちる。ケビンは小夜の眼の前にいた。

「あっ！」

小夜も稜も今の状況をようやく認識する。

「すまないな、お嬢さん。」

ケビンは手をあげ、しかし、それを振り下ろすことなく後ろへと飛び退つた。

「つたぐ・・・、いい時期に現れるなあ・・・。ワレイド・・・。空間から割つて出てきたのは初老の神父さんのような服を着た男性。「審問の魔術師」ワレイドであった。ついでワレイドの出てきた後から数人の魔術師がでてくる。

「そこまでじや・・・、「幻想」の呪術師ケビンと「悪魔剣の使い手」レイル。」

「くそつ！」

レイルは悔しそうに悪態をつく。しかし、ケビンは余裕を持つた態度で対峙している。

「まあ、ここまでお揃いでは僕たちもすがに苦しいですがね。・・・少し見誤りましたね。」

「！？」

ワレイドは鋭い声を飛ばす。

「！」の景色は幻想じや！感覚を研ぎますませー。」

「さすがに察知も速くていらっしゃる。・・・しかし、何も見えな

いのでは意味がない。」「ぐわつ！」

一人が倒される。しかし、どこにいるのか分からぬ。というよりも誰が誰のかすらもケビンが張つた呪術による幻想で分からなくなつていた。次々とケビンが連れてきた配下の人間は倒されていく。加えて、全員違う幻想でも見せられているのか同士討ちをしたりあらうことかワフレイドに攻撃を仕掛ける者までいた。

だが、歴戦の兵ワフレイドもすぐに機転を利かし、大声で呼ぶ。

「エリス！」

エリスもエリスでその声の意図を理解する。

「聖結界」！

彼女の技聖結界とはその範囲の呪術を無効化するもの。それを一帯に広げれば……。

「ほお、僕の技を吹き飛ばすとはさすが。」「今じゃ！」

「だけど……。遅かったですね。チェックメイト。」「

場は非常に魔術師側にとつては不利な状況になつていた。レイルが牽制して、近づけないエリスにワフレイド、渡部に山城。対してケビンは小夜に最接近していた。

「それでは最後くらい華々しく散らせてあげよう。デビルズワード」「死への送花」。

小夜の四肢が光り出し、小夜は苦痛に顔を歪める。小夜の四肢から放たれる呪力を使つてているのだ。

「や、やめろ！」

稜はものすじく久しぶりの大声を出す。その手を小夜の手と繋いだまま。

「おや、一般人を殺すのはしのびないが……、覚悟してもらおう。

ケビンの向けた手には眩い光が集まつていた。

「逃げて……。」「

小夜が弱々しく咳く。その声はしんとした静かさがあつた。どこかにあきらめにも似た何かが。稜はぞつとした。小夜が死ぬ。それだけは考えられないし、嫌だつた。

「嫌だ。」

「逃げて・・・。」

小夜は繰り返す。それでも稜の心は決まつていた。

「嫌だ！！！俺は小夜をおいていけない！」

「稜・・・。」

「まつたく熱いお二人さんだな。それでは良き旅路を。」

光が向かつてくる。稜は小夜と光との間に入つて、小夜をかばう。

「嘘だらうつ・・・？」

渡部は呆然と呟く。死んでしまつた。稜も小夜も・・・。

「ははは・・・。マジかよ・・・。」

あいつらが殺した。許せない。

渡部は自分で燃え盛るような熱さを感じた。「導火の魔術師」たる彼の本性。

(「ロシタヤツラガニクイカ?」)

「ああ、憎い。」

(「ジブンノチカラヲモウオサエタリシナナイカ?」)

「しない。これ以上後悔はしたくない。」

(「イイダロウ。オレトオマエノフタリテヒトツノシンノチカラヲミニセテヤロウゼ」)

最初に渡部の異変に気づいたのは山城だつた。

「どうしたの?」

「憐、俺ちよつとあいつら殺してくるわ。」

渡部は自分の事を「俺」などと言つたことなどなかつたのに、今は人が変わつていた。

「そこの雑魚。何している?お前も殺してしまうぞ?」

レイルはまだ何も気づいていないようで渡部に剣は突き付けている。

「馬鹿が・・・。」

渡部はそれだけ呟くと、堂々と歩みを進める。レイルの攻撃範囲に入ると、レイルはためらわず剣を振るう。しかし、それは途中で止められた。渡部の周りをものすごい魔力の炎の壁が覆っていた。

「ばかな・・・？」

「死ね。」

「なつ！」

渡部は炎をまるで触手のように自由に使い、レイルを攻撃していく。そこには今までのような弱さが嘘のようになくなっていた。

「ぐつ！くそがあ！・・・！」

レイルは憤怒の声を上げるが、間髪入れずに迫る炎の触手に攻撃できないどころかダメージまで受けていた。

「何だ、こいつ？今までとは全然違う・・・。」

レイルはプールの時に感じた恐怖と似たような感じを受け、下がる。それをエリスは見逃さなかつた。

「「聖結界」！」

レイルの動きを封じる。

「「崩落の千矛」！」

フレイドの詠唱でケビンは全てを防ぐという神業をやつたあと、邪悪な笑みを浮かべ、言った。

「まあ、今日はこれくらいで終わりだ。目標は達せられたしな。」

ケビンは一瞬で消える。残されたのはレイルだけだった。

「くつ・・・、殺せばいいさ。俺は用済みだ。いてもいなくていい存在つてことだ。」

レイルの自嘲気味の笑いにフレイドは表情を変えず、詠唱し始める。その様子に声を上げた人間がいた。

「待つて下さい！その人を殺すのを・・・。」

「どういうつもりだ？」

「意外にもエリスだった。」

「どういうつもりだ？」

ワレイドは冷たい視線をエリスに向ける。

「それは・・・その・・・。」

言いあぐねるエリスに、声がかけられた。まったく予期していない人間が。

「いいんじやないのか？」

「り、稜！？」

エリスの驚く声は他の人間にも伝わった。

「稜！？・・・それに小夜も！」

山城は本当に嬉しそうに声を上げる。それは渡部にも伝わったらしい。

「な・・・お前たち・・・、生きてたのか！？」

先ほど纏っていた殺氣と炎は崩れ落ち、いつもの渡部に戻っていた。稜は渡部に笑みを向けると、エリスとワレイドの方に向き直った。

「そいつ、確かに敵だつたのかもしれない。けど、「昨日の敵は今日の友」っていう言葉もあるみたいにさ、仲良くなれるかもしれない。」

「そんな絵空事を・・・。」

ワレイドはやれやれと言つた感じで首を振る。

「・・・それよりも貴様。何故ケビンの攻撃を喰らつても平氣だつたのだ？」

稜は自分の体を見て、ワレイドの質問に答えた。

「よく分からぬけど、あいつの攻撃が俺の体に吸い込まれていつて・・・・。」

「「吸い込まれた」？」

稜が頷くのを思案顔でワレイドは考え込んだ後、突然ふいと稜に背中を向け、エリスに向けてこう言い放つて帰つた。

「儂は仕事があるので帰る。」

ワレイドが帰つた後、渡部との戦闘でケガしたレイルを診ようとしていたエリスはレイルに話しかけられた。

「さつきはありがとう。やっぱり君は素敵だ……。僕は間違えていたのかな。」

「何を？」

エリスは手当の準備をしながら、尋ねる。

「僕は今まで君を手にしたくて……、手にしたいが故に君たちを困らせ、傷つけようとしたのに、殺されそうな僕を助けてくれた。あんな方法で君の愛を得ようとした僕を。

正直嬉しかった。僕はだから間違ってたんだろうなあって……。

エリスはその様子を見ながら、わざと冷たい声で言い放った。

「そうですよ。本当に毎日毎日しゃべりしゃべりして……。

「そりだよなあ……。」

「だけど、そんなあなたを私は放つておけなかつたんです。」

エリスのその言葉にレイルはぱあっと顔を輝かせる。

「か、勘違いしないで下さい。別にあなたの事を好きになつたわけじゃないですから。」

「そんなのいいよ！君が僕を放つておけなかつたっていうだけで。」

「だーかーら！そんなに特別な意味はないんですよー？」

「あいつら仲いいなあ。」

稜はそれを横目で見ながら、渡部たちに自分の身に起きたことを説明してもらっていた。

「あなたがあれほどの高呪力の受けて無傷なのは非常に稀有な能力、「中間体」であると考えられる。」

山城は相変わらず無表情でそれでもやや表情に驚きを含めて説明する。

「「中間体」？」

聞きなれない言葉に稜は首を捻る。山城は続けて答える。

「普通は呪力を受けると、体内中の呪力が増加して、普通の人では耐えきれなくなつてその人は消えるけど、「中間体」の人間はどれだけ強い呪力を浴びようとも常に中性力によって体を構成するよう

になる体質があるから体に呪力が残つてもそれを自分の構成物質として使うことができる。・・・要するに人間版「エネルギー吸収体」。

「試しに「凋落への誘い」という術を唱えてみるんだ。」

渡部の言葉に頷くと「凋落の誘い」という言葉を呴く。その瞬間だつた。

稜の言葉が空氣中に浮き出てきて、それらは一番近くにあつた木へととりついた。

と、あつという間に木は朽ち果てていく。

「これが君の力。あの「幻想」の呪力をもろにくらつたんだ。今の君には並みの呪術師より強い力がある。」

渡部の言葉に稜は自分の手を見た。

「ねえ、大丈夫？」

そこに小夜が声をかけてくる。小夜は稜が盾になつたおかげか無事だつた。

渡部はその様子を見て納得する。

「そういえば、彼女の力もあつたんだな。」

「わ、私？」

「ああ、君の四肢は呪力を絶え間なく放つほどの強力な呪力を持っている。僕たちはお守りをもつてているから大丈夫だったが、稜は平氣なわけがなかつた。しかし・・・、「中間体」だとしたら説明がつく。とすれば、稜。君はどんでもない力を持つているのかもしねい。」

「ま、待つてくれ・・・。じゃあ小夜が今までに会つてきた人間は・・・。」

自分でも絶えず呪力を浴び続けてきたのなら小夜との接触の多い人間、とくに家族はとうの昔に消えているのではないか。だが、渡部は首を横に振つた。

「前も言つたと思うがあくまで呪力は「世界の負のエネルギー」にすぎない。呪術師が使う呪術は呪力を糧にした力にすぎないから、

まったく別もの。彼女の力は呪力と対極の魔力を持つ人間には中和されるという危険がつくが、それもそう言つた力を微々たるものしか持たない一般人がそう言つた事を起こす危険性は少ない。・・・

たぶん、起きてもその人の負の感情を増幅させる程度だろうね。」

その言葉に稜は思い当たることがあった。例えば、小夜の家族。彼らは小夜に必要以上に怯え、迫害し、逃げた。いくら気味が悪いからって実の娘にそんなことするものなのかな?と思つていたが、もし負の感情が増幅して、小夜への嫌悪の気持が増えたとしたら?十分考えられる話だつた。小夜が体育の先生によつて自分の四肢の事が知られた時も、先生は嫌がる生徒の長そで長ズボンを脱がせた。正直やりすぎだと思ったが、もし体育の先生がいくら注意しても聞かない生徒に業を煮やした憎悪が増幅したのなら?

「そうだつたのか・・・。じゃあ小夜の四肢は何とかして普通の四肢に直せないのか?」

稜は一縷の望みをかけて尋ねる。しかし、渡部は首を横に振つた。  
「これはあくまで予想だが、彼女は生まれたときから今まで成長に伴つて四肢も大きくなつたという現実を鑑みれば、それが彼女の腕のデフォルトなかもしれない。」

「そんな・・・。」

小夜はずつとこの様々な力を持つ四肢と付き合つていかなければならないのか。だが、稜の気持ちを察したのかは分からぬが絶妙のタイミングで山城は加えた。

「直せるかは分からぬけど、たぶん『奏楽の魔術師』なら・・・。」

「そつか・・・。彼女は呪力の扱いに長けていたからね。それに確か呪力汚染も詳しかつたな。」

「『奏楽』がどうかしたんです?」

エリスがレイルの手当を終え、レイルとともに戻ってきた。

山城と渡部はやや警戒するが、レイルはそんな様子を見てはつきり言い放つた。

「もう何もしねえよ。それに俺の当面の敵は何の因果か、呪術師になつたしな。」

「なら、いいんだが……。」

渡部がおとなしく下がつたのを見てレイルは不思議そうに見つめる。（あいつ、あんなに弱かつたつけな？）

レイルの闘つた渡部はもつと強力な魔力と闘気をもつていたような気がしたが今はそれがまったくない。レイルは自分の思つていることが顔に出ないように気をつけながら、目の前の会話に耳を澄ませる。

「いや、小夜の手を直せないかと思つたんだけど。」

「「奏楽の魔術師」ならいけるんじやないのか？」

渡部と稜の言葉にエリスは眉根を顰める。

「それは・・・たぶん無理です。「奏楽」は今ヨーロッパ戦線に投入されますし。」

「ヨーロッパ戦線？」

小夜が首を傾げるのにエリスは頷いて答える。

「もうすぐ「悪魔陣の創造主」と「銀の夜」が戦いを始めようとしてるんです。両方の本陣があるヨーロッパで。だからほとんど総力戦になるみたいです。だから・・・。」

「だけど、ヨーロッパ戦線の開戦はまだみたいだし、エリスの空間転移の術でいけるんじやないのか？」

レイルの言葉にエリスはキレぎみに答える。

「そんなに遠くに飛べません！そんなに遠くに飛ぼうと思ったら、それこそ今日のケビンくらいの呪力を超える呪力がないと…魔力もそう！どこにそんな膨大な力が・・・。」

そう言いかけてエリスは皆の眼がある一点に集中してこることに気づいた。そして、彼女自身も気づく。

「その手があつたんですね・・・。」

その日のうちに稜たちはエリス経由でヨーロッパの「銀の夜」の人

間に連絡を飛び、稜は結構長い空間転移の術の詠唱を練習し、それぞれ準備を整えていた。彼らが行く先は険しいこともしらずに。

一方、ヨーロッパ北東部「銀の夜」本陣。

彼らは急いで作られた本陣のテントで日夜会議に勤しんでいた。他の兵士もこれが魔術師の未来を占う一戦であることを認識しているらしくどこか浮足立っていた。

そんな本陣のテントではまだ若い女性の魔術師が声を張り上げていた。

「何故、私たち祭具守護隊がこのような危険地帯に配置されているのですか!? 私たちは本来殺すことを目的とした戦闘方法は素人同然でこんな激戦区にいけば全滅確定ですよ!」

彼女の二つ名は「奏楽」、名はミリー。祭具を守りし一人で呪術の事に関しては敵以上にそれを知る人間だが、彼女とて戦闘経験はないに等しい。最後の戦闘経験は約5年前とブランクもある。それでも戦争の恐怖を知っている人間だからこそ、何もできない人間が役立たずなことを知っていた。だが、そんな彼女の様子を見て鼻で笑い立ち上がった人間がいた。

「迅雷の魔術師」、コーバー・フライである。先遣部隊の大將にして「銀の夜」の本部守護隊の筆頭でもある、彼はミリーが知る中では最も「表の人間」らしい魔術師といった。「裏」を蔑み、死んでも構わないという下種な人間のことだ。

「まったく君たちは理解していない。君たちは祭具守護隊という以上に「銀の夜」の一員だ。そうやつて駄々をこねられると後々士気にも影響するのだよ。」

その言葉を聞いてミリーは心中で叫ぶ。

（このくそ野郎！「審問」がいないからつて調子に乗つて……！）  
だが、そんなことを言えるはずもない。ただ、彼女は睨むことしかできない。そんな中おどおどとした拍子抜けする声が座に響いた。  
「も、もうやめましょうよ！すいません、「迅雷」さん……。う

ちの大将は今機嫌がよくなくて・・・。」

このひ弱そうな男の一つ名は「守宝」、名はモ里斯。祭具守護隊では守備的役割の人間である。だが、その力は「審問」と並び出でるほどなのに、彼はその性格で今回はミリーの副将的立場にあった。

「何で、あんたが出てくんのよ!」

「す、すいません・・・。けど争うのはよくないですよ・・・。」

二人がひそひそ話をしていると、表の人間からも再び意見が飛んだ。「確かに魔力はあるとも戦闘経験はないに等しいですから、戦闘経験豊富な我が方からも増援を出すべきかと存じます。」

そう言つたのは「碎土の魔術師」デトナー。表の人間では良識派にあたる人間で、「迅雷」の副将にあつた。今回の作戦は長年ここ一帯を警備していた遊撃隊を加えた「表の人間たち」の本隊に祭具守護隊の副隊が加わる格好であり、当然、それらの軍の扱い方には苦慮していた。

「それでいいですよ・・・、ねえ? ミリー?」

おどおどと尋ねてくるモリスをミリーはキッと睨むと、大声でその場に対し、威圧する。

「馬鹿言わないで! デトナーの意見はもつともらしく聞こえるけど、所詮は付け焼刃。闘うことに異論はないけど、うちは後方支援の方がもつと力を發揮できるし、実際そんなのばっかり!」

「ふん、これだから、小娘は嫌いだ・・・。」

コーバーが呟くのをミリーは睨みつけ、そこで凜とした静かな声が彼女を諫めた。

「そこまでだ、ミリー。」

「トウドル・・・。」

それは座の一一番端で静かに瞑目し聞いていた「聖印の魔術師」トウドルだつた。祭具の秘密を開けるのに必要な聖印の意味を知り、使用できる唯一の存在にして、祭具守護隊屈指の知将。ミリーは期待した。彼なら変えてくれると。だが、彼の口からでてきた言葉は彼女の期待を大きく裏切つた。

「分りました。戦場に到着するまでには少し魔力が必要になりますので陣の構築に行ってまいります。ミリー、モ里斯、行くぞ。」

そう言うとトウドルは本部を出していく。この瞬間、祭具守護隊が最前線で戦うことが決まった瞬間でもあった。ミリーは全てを破壊しあくなる衝動を抑え、モ里斯とともに外に出る。そこではトウドルが静かに立っていた。彼はミリーとモ里斯を見ると、静かに話しかけた。

「この戦・・・妙だ。ここは「銀の夜」の支部でここが落とされると相当苦しくなるのに、本部はまったく守る気がないようにしか見えない。実際ここは総大将があんな馬鹿ではここも数日経たずに落ちるだろう。」

「よくは分かりませんが、何かエドワードさまにもお考えがあるのでは？」

「それが分からぬ。とりあえず、我々は多くの敵を倒し、戦果をあげ後の事を考えねばならぬ。今のように日陰者のままでは不利益をこうもりり続ける。・・・今日のようだ。我々祭具守護隊は力を見せねばならない。」

「そうね。こうなつたらやるしかないわ・・・。癪だけど。」

三人は頷きあつた。そのとき、ミリーの携帯に着信が入り、彼女は携帯を開く。メールだった。そこには懐かしい名前があつた。ミリーの友、エリスだった。エリスのメールには次のように書かれていた。

「少しお願ひしたいことがあるの。例の「ファウストの四肢」について。彼女の腕を見て。それから可能なら直して。」

さらに下ページにいくと、

「というわけで明日そちらに行きます。たぶん呪力の空間転移で行くので、対呪力シールドの一部解除もお願い。時刻は9時ちょうど。

「

ミリーは早速二人にそれを見ると本陣にそれを見せに行つた。時はもう夏が遠くへ行きそうなことだった。

## 第五章 激動、そして終焉

鮮血が一体に飛び散る。一体何人の人間を倒したのだろうか？それすらも覚えていない。

「「先駆の刃」！」

もう飽きたほど唱えた呪術を唱え、敵を撃破する。

「「死への送花」！」

失念していた方向から呪術が飛んできて皮膚をかする。その皮膚は腐る。

痛い、苦しい、助けて・・・。

「大丈夫？ 稜！？」

小夜の悲痛な声が聞こえるが、疲れ果てて返事すらできない。周りで戦う人間も同様らしく、渡部も山城もエリスもレイルもぼろぼろでそれでもなお立っている。

さらに周りでも魔術師対魔術師の争いが起こっており、場は收拾がつかないほどの混乱状態にあつた。

稜はさらに向かってくる呪術師と相対しながら、こうなった原因を思い出しながら、我が身を呪うしかなかつた・・・。

「「異空間転生」」

稜は抑揚のない声で唱えると、目の前に暗い穴のような空間が生まれる。

稜以下六人は次々とその中に飛びこむ。術の維持のために最後に飛び込んだ稜が見たものはそれなりに森の開けた場所に場違いに立てられた二階建てのレンガ建てのモダンな建物だった。

「稜、こっちです。」

エリスが手招きしているのを見つけて、稜はそこまで行くと、大人のお姉さんといった感じの気の強そうな美しい女性が立っていた。

稜は眼があつたので挨拶すると、向こうもにこつと微笑んだ。その笑顔がかなりきれいだったので、稜は思わず赤面して、小夜がジト目で睨んでいることに気づき、稜は慌てて表情を引き締めた。

「私は「奏楽の魔術師」、ミリーです。よろしく。」

「どうも、久野稜です。」

ミリーは早速本件の話に入ろうとして、周りを見回し、すぐに小夜のところで止まつた。

「なるほど、あなたが例の「小夜さん」？」

「あ、はい・・・。」

小夜がおどおどと頷くと、ミリーはエリスの方を見て言った。

「ここの人達皆信用できる人？」

「ええ。」

エリスがそう即答したのを聞いて稜は嬉しくなる。エリスの表情を窺っていたミリーは納得したように頷いて言った。

「正直これは「ファウストの四肢」で間違いないわ。」

「やつぱりか・・・。」

渡部は神妙な顔になる。

「それでだけど実は私たちの守っていた祭具の中に呪力と魔力を強制的に中和させて、汚染を無くすような効果のものがあつたと思うの。たぶん、それでいいけるかな・・・。けど、「ファウストの四肢」の拒絶反応も気になるし・・・。検査させてくれない?」

「はい・・・。」

「よしつーじゃあ決まり! それじゃあ・・・。」

そうミリーが言いかけて、異変が起こつた。

「な、何・・・・?」

突然何もないところから現れる人。それもかなりの数。

彼らは近くにいる魔術師を次々と葬つてはいる。魔術師もようたくそれが何か理解する。そして誰かの叫びがこだました。

「敵襲!」

それからあつという間にいたるところで戦闘が繰り広げられるこ

とになるのだった。

「くそ・・・。」

まだ終わることはない。特に自分の力が呪力である以上、敵を倒すには物理的攻撃が要求され、限られた呪術の中でしか攻撃できないため、相当苦戦していた。

殺すのは嫌だ。そんなことしたこともない平和な日本で生まれたのに。

たまに小説で見た一文だが、本当に稜は思った。自分が人の命を狩っている。それが自分の体の中に底のない暗い穴を作っているようだ、それは自分の足元にある嘔吐物からも分かる。それでも彼は死にたくないから闘つた。

そして、気づけば、呪術師側は撤退していた。だが、多くの呪術師が自分の足元で倒れていて、周りにいた人間がほとんど消えているのは深い傷跡を残したのは確かだつた。そして、その日の夜の定例会議に連れてこられた稜はそこで今日起きたことを聞かされるのだった。

「いいか？そもそもこんな得体のしれない奴をいれるから今日みたいに奇襲に会つて壊滅に追い込まれるのだぞ！？こいつらを引き入れた祭具守護隊の「奏楽」に連帶責任として「守宝」と「聖印」も処刑してくれる！」

「迅雷」、コーサーはこれを機と言わんばかりに声を荒げ、机を叩く。

会議の場にいる数人はそれに付和雷同するが、そこに疑問を呈したのは意外にも副将「碎土の魔術師」デトナーであつた。

「お待ちください。ここで彼らを、ひいては「銀の夜」の象徴的存在を殺すのはいかがかと思います。それに彼らは戦力的に見ても重要です。特に「守宝」は再び対呪力シールドを構築するには不可欠ですし、「聖印」においては参謀としてうつてつけですし、「奏楽」

もその戦闘力はきっと敵の脅威になります。」

「だが、それでは今日の事をそう説明すればいいのだ？忌々しい四肢を持つ人間を招き入れるためだけに多くの同胞が犠牲になつたんだぞ！？」

だが、「迅雷」はいかんせんキレていた。だが、そこに落ち着いた声が響く。

「見苦しいな、いい加減にしないか、コーバー。」

「聖印」、トウドル。彼はやや怒りを孕んだ声で叱責する。

「貴様、いつから俺に意見できるようになつた！？」

コーバーはトウドルに噛みつぐが、平然とトウドルは受け流すと答えた。

「今、ここで憎いだなんだのと言つていれば楽かもしけんが、それでは何の解決にもならん。もちろん然るべき罰は受けるが、その前にこの場をどうするか、だ。相手は同じ人間だぞ。遅れば死を招く。全滅だ。」

「そんなものは分かつていて！テトナー！防衛ラインの再構築はいくらくらいかかる？」

「たぶん、一日はかかります。元々結界の読み手は少ないがあまりにも死にすぎました。」

魔術師と呪術師との戦いにおいて大事なのはいかにして有利な場所で戦うかということである。どちらも術の特性上、柔軟性が高く、下手な場所で戦えば、それは即全滅につながる。よつて、彼らの戦ではなるべく敵が小細工しないように広げた場所で戦うのである。だが、「时空転移」という術式の開発以降、敵の本陣へ突然奇襲をかけることができるようになり、当然お互いに対応を迫られ、結果的にどちらかを通さないシールドを展開するようになつたのだ。しかし、それがないということは再び本陣に入られるとのこと。ただでさえ、見張り要員等を多数失つた「銀の夜」側としてはすぐにでも構成したいのだが、それを構成していた人間も殺され、今や軍の中でもシールド展開ができる人数は大きく制限されていた。

「ここままでは敵にまた攻め込まれるぞ……。本部には増援要請を送ったのか？」

コーバーが背後に立っていた秘書に尋ねると、秘書は冷や汗をかきながら少し焦った声で報告した。

「そ、それが……、本陣は南西ヨーロッパ支部の応援に行つているため人数は増やせないと。」

「何だと！？」

一時は冷静を取り戻しつつあったコーバーは再び声を荒げる。

「エドワード様は何を考えらしているのか！？今は本陣にかなり近い我らの事の方が先だろう！フェルマン！」

コーバーの呼びかけに応えて現れたのは「乱戦の魔術師」フェルマン。

その二つ名から混戦を得意とする戦闘系の魔術師であるように思われるがそうではなく、敵を乱れさせて戦うこと得意とする知将である。

「すぐさま、エドワード様に電話を！」

「申し訳ありません。エドワード様から伝言でそちらの軍勢を本部千メートル以内の対呪力シールドを張った場所まで撤退するようにと申しつけられてあります。」

「……くつ。ならば、即異空間転移を行つぞ！全軍準備に……。」

「申し訳ありません。それができなくなつておるのを報告するのを失念していました。ここ一帯に対呪力シールドを張られたらしく、魔術が使えなくなつております。」

「何故それを先に言わん？くそつ……！忌々しいが徒步で撤退するしか得ない。」

魔術師は基本、不思議で強力な力をえるだけの人間であり、それが封じられるということはまったく非力な人間のまま、迫りくる呪術師から逃れねばならない。

しかし、もちろんそんな状況に懸念を示した者がいた。それが今回

の軍の兵糧担当「波動の魔術師」、トリルだつた。

「お待ちください。ただ丸腰のまま何の策もなく逃げれば全滅です。・・・それに非常に申し訳ないですが、兵糧も切れかけておりまして。」

「そんな事は分かつておる・・・。」

コーバーは徐々にやる気をなくしていつていた。元々最前線で戦っていた人間である。軍全体を見るのは不可能といえた。

「少し考えさせてくれ。あの会議は「聖印」と「碎土」に任せる。

「そう言つと、彼は本部を出て、寝室へと秘書を連れて戻つて行つた。「迅雷」が出ると、後の事を任せられた「聖印」トウドルと「碎土」デトナーが会議を開いた。

「では、その撤退方法だが、なるべく犠牲を減らすためにしんがりに呪術師達の相手をさせ、その間にシールド圈外まで出て、威嚇しながら指定された場所まで逃げるという案をとつたほうがいいと思う。」

トウドルは冷静に居並ぶ人間たちに言つ。だが、その中の一人がトウドルに尋ねる。

「しんがりは誰が務めるんですか?」

「たぶん、この中で呪術を使えるものか対魔術シールドに対し、抵抗のある者、或いはそれを理解しその中でも魔術の使える人間・・・。要するに戦闘能力のあるものだ。」

「しかし、無理矢理ではよくないので志願制にするべきです。」

デトナーはそう進言するが、誰もやりたがらないのは明白だつた。だが、ここで一人の人間が手を挙げた。それは「奏楽」ミリーだつた。

「私は呪術に詳しいから、対魔力シールドの中での対処法なら知つてゐし戦える。」

さらにもう一人、「悪魔剣の使い手」レイルだつた。

「僕はそう言つたものとは無関係だから戦える。ここの人間が多く

死んだのは僕らのせいだから、戦います。」

稜も手を上げようとして、自分の手が震えていることに気がついた。分かっている、怖いのだ。それでも・・・。

「お、俺も・・・やります・・・。」

「いいのか?」

「聖印」の声は何かを探るようだった。稜はゆっくりと頷く。「聖印」は納得したように頷く。

「他にはいなか?」

稜の隣にいた小夜も手を挙げる。

「わ、私も・・・。」

しかし、彼女の提案には「聖印」は首を振らなかつた。

「君は強い呪力を放つ四肢を持っているだけで、戦闘はできない。むしろ敵の栄養分となってしまう可能性がある。」

「でも・・・!」

小夜はまだ何か言おうとしたが何も言葉にならなかつたのか、脱力したように先ほどまで座っていた椅子に再び沈み込むように座る。

「他はもういないうだな。」

「待つて下さい。僕も入れてもらえませんか?」

そう言つたのは渡部だった。山城も横で同じという感じで首を縦に振る。

しかし、「聖印」はどこまでも冷静だった。

「仲間を助けたいという気持ちは分からんでもないが、お前も山城も普通の魔術師でしかない。諦める。」

それだけ言つと、場は静まり返つた。

「ええ、ではこれをもちまして作戦会議は終わりです。後ほどしがりの方と補給部隊、各部隊部隊長は話し合いをするので残つて下さい。」

そう言つと、場は解散していく。そんな中小夜は一人重い気分に浸つていた。

作戦会議が終わつて出てきた稜に小夜は駆け寄る。

「どうだつたの？」

「うん・・・・、まあ。」

稜は答へづらそうに言葉を濁す。顔色もどこか青白かった。

「やつぱり、やめようよ・・・。」

小夜は一縷の望みをかけて尋ねてみるが、稜は弱々しくそれでも決然とした口調で小夜に語りかけた。

「俺はこの少しの間たくさん経験をした。本当にわずかな時間だつたけど、楽しかつた。いつの間にかつまらないつていう思いは消えて、もっと一緒にいたいつていう気持ちになつたんだ。だけど、そんな思いは皆がいなきや成立しない。だから、俺は闘うよ。・・・。怖いけど。」

「・・・・つの馬鹿！」

しんみりした雰囲気は小夜の一言で終わりを告げる。稜が小夜の顔を見てぎくつとする。

「何で・・・、そやつて他人のことしか考えないの！？あんたがいなくなつたつて成立しないじゃない！」

「だけど、俺の代わりは・・・。」

「稜は稜！私たちにとつても、私にとつても大事な存在なの・・・。」

「小夜の瞳から涙がこぼれる。稜は何も言わず、ただその涙を拭いてあげた。

夜は冷たく、けれど鮮やかにふけていく。

「全軍、今日は非常に苦しい日になるだつ。だが、それを乗り越えれば我らは再び栄光の日々を取り戻すことができるだつ！」「迅雷」コーバーは立ち台から全員に向かつて大声で叫ぶ。

「さあ！行くぞ諸君！」

その言葉に全員は雄たけびを上げる。そして、各隊の班長の指示に従つて全員が動き出す。そして、全軍が出発した後、「奏楽」ミリ

ーは稜とレイルに指示する。

すでに「銀の夜」の動きを察したのか、次々と本陣に呪術師が現れる。それはしかし、一撃の爆風で吹き飛ばされる。

対呪力爆雷装置である。

それも広大な敷地に。それだけですでに多くの呪術師が消えていたが、さらにそこにミリー、稜、レイルが混乱の最中襲いかかる。しかし、圧倒的に多い数の敵に囲まれるのを防ぐために一撃で離脱。要するにヒットアンドウェイ戦法である。

「敵がいたぞ！」

発見されたのか様々な場所からそういう声が聞こえる。だが、稜たちも逃げ切れる勝算があつた。

「デビルズワード「零時の惨禍」！」

誰かの言葉が聞こえる。が、稜は逃げない。そして術は命中する。だが・・・、効かない。稜の「中間体」のおかげである。さうにこの体質のおかげで彼はさらに強力な技を使える。

「デビルズワード「腐食の霜」！」

言葉は実体化し、一帯に雨を降らせる。・・・ただし体や大地や何もかもが腐食するというおまけ付きで。加えて呪術師は呪術を防げない。まず、そんなことがなかつたからだ。

しかし、今はそれが仇になつて次々と消滅し、そうでなくとも死地とかけた大地に足を取られ、次々と倒れて行つた。

さらに撤退するが、敵も生半可なことでは倒れない。しかも、稜たちをしんがりと認識したのか、次々と本体の方へと向かっていく。しかし、彼らはできず途中でぶつかる。

呪術師を連れなくする盾。

対魔力シールドに対して対抗策を持つ唯一の魔術師「奏楽」であった。

呪術師達は先に稜たちを殺した方がいいと思ったらしく、向かってくる。ここからが正念場だった。

その頃、本隊はあと一歩といつとこりで全滅寸前になっていた。  
一人の男によつて。

「幻想の呪術師」ケビンである。彼は何もできない魔術師をここぞ  
とばかりに消していく。

いまや立つてるのは小夜とコーバー、山城、渡部、デトナー、ト  
ウドル、モリスと数人だけである。

「ふん、歯ごたえないな。まあ、これも任務だし、しょうがないの  
だが。」

「このひきょう者ガ！」

コーバーは歯をむき出しにして言つが、ケビンは笑つて受け流す。

「まあ、君たちも任務だつていつて僕の同胞殺してただろう？」

「だが、このような状況ではなかつた！」

「状況で変わるんだ？人の命も何もかも。・・・そういうえば、君も  
しかして「迅雷」？」

「だつたら何だといふんだ！」

コーバーはそう声を荒げ自分が言つたことがどれほどの意味を持つ  
のかを知つた。

その場にいる全員がケビンの異常な気配に気がつく。

「そりか・・・。じやあ死ね。」

そう言つと、右手を一振り。

「はぐあつ・・・！」

コーバーは木端微塵になつていた。

「これで僕のかたき討ちは終わりだ。さて・・・。」

「何をするというのじゃ・・・？」

小夜の凛とした声が響く。その場の人間が全員ギョッとする。そし  
て、全員の視線の先にいたのは通常の小夜の何十倍という呪力を出  
す明らかに小夜とは違う小夜の顔をした誰かがいた。

「一度妾とは会つたの。そういえばあのときは妾が目覚めておらな  
んだから、正確には今日が初めてか。よろしくの、童。」

「僕を子供扱いか・・・。それだけの呪力があれば当然かもしけな

「いけど、それでも許せないなー！」

ケビンの詠唱が発動する。しかし、小夜はまったく動かずただの呪力だけで防いだ。

「な、なんて強さだ！？お前何者だ？まさかファウスト！？」

その言葉に小夜は鼻で笑う。

「愚かな。ファウストなどと一緒にするな。名はルシファー。貴様も知つておらう？呪術の神にして悪魔の上位に位置するものじゃ。」「ばかな・・・、ルシファーだと？」

「そうじや。何ならその身をもつて体験させようか？」

そう言うとルシファーは一言呟いた。

「デビルズワード」「狂乱の嵐」。

普通呪術は言葉が具現化させるのに時間がかかるのだが、一瞬だった。ケビンは構える暇もないまま、デビルズワード最上級に位置する奥義を受けた。

そして、消えた。圧倒的呪力に飲み込まれて。

「ああ、早く行け。もうそこじや。」

「・・・君は行かないのか？」

渡部は尋ねる。小夜もといルシファーは穏やかに笑つて首を振る。

「まあ、君なら助けてあげられるかもしれない。稜たちの事頼んだ。」

「そう言つうと、彼らは走り出した。その後ろ姿を見て、呟いた。

「稜も助けに行きたいが、どうやらそれどころじやなくての。」

そう言つて彼女は今度はあらぬ方向を見て大声で叫んだ。

「そこにあるのは分かつておる！出てこんか！」

そして、ルシファーの前に現れたのは、エドワードだった。

エドワード・ミラン。「銀の夜」頭首は優雅に微笑んで、ルシファーに尋ねる。

「どうして気づいた？」

「貴様のように殺氣をばんばん放つておれば分かるわ。それよりも何じや？わしを始末しにきたのか？・・・ファウスト。」

「あれ？ 何でお見通し？」

エドワードはひょいきんな声を上げるが、ルシファーは冷たい目で続ける。

「貴様の目的は分かつてある。魔術師と呪術師が死んだあとに残る「靈魂」を使った創造魔術。鍊金術師らしい考え方じゃ。貴様はその宿主を捨て、自分の体にそんなにもどりたいのか？」

「何のことっていいたいけど・・・、そこまで知られたんじゃしょうがないね。ずばり正解。さすがは悪魔。」

「褒めてなどいらん。世界各地で起こる「銀の夜」と「悪魔陣の創造主」の戦は「靈魂」を集めるためのものと考えればすぐに分かる。世界各地に漂うことになる靈魂を線で繋ぎ、その線の持主たる貴様に全ての力を集め、今度こそ不老不死にでもなるひとつという魂胆じやろ？」

「そうだな。けど、それだけじゃない。」

「まう・・・？」

「俺はこの世の中をつぶしたい。それで、悪魔たちにぎやふんと言わせてやるよ。」

「まったく愚かなことを・・・。」

ルシファーのあきれ果てた嘆息にもファウストは微笑みを絶やさない。

「まあ、止められるものなら止めてみな。」

「後悔せんようにな。」

二人は視線を交わすと、すぐに高速で動く。彼らのぶつかった後は爆弾でも爆発したかのように地は大きくえぐられ、周りは台風でも来たかのようにもぎ取られていた・・・。

「くそつー！ 何でこいつらこんなに湧いてくるんだ？」

レイルは息を荒げ、返事もしない。それは稜も同じだつた。

それでも前に進むのだけはやめない。彼らは諦めていなかつた。外

を出れば、助かる。しかし、強烈な突風が吹きすさぶ。  
彼らはそれを見て、驚愕した。闘っているのは小夜と・・・、「銀  
の夜」頭首エドワード・ミランだつたのだから。

## 第六章 最後の戦いと解決

「ほほお、やりあるな童。」

ルシファーは心底樂しそうに言つ。だが、エドワードもといファウストは息も途切れ途切れ、体も傷だらけ。力の差は圧倒的だつた。「何故だ・・・? ルシファーとはいえでも人間の器ならば百分の一百出ないものとふんでいたのに・・・。」

忌々しげに眩くファウストにルシファーは悠然と笑みをたたえ子供言い聞かせるような口調で言つ。

「そうじゃな。確かに貴様の予想は正しいが、問題は妾の元の力。それを見誤つたようじゃな。」

「馬鹿な、これがお前の百分の一だと・・・。化け物め!」

「何とでも言うがよい。これで終わりじゃ。『デビルズワード』『墜落の力』。」

「ぐおつ!」

呪術を避けきれず、ファウストは地面に倒れこむ。ルシファーはそれとは対照的に優雅に着地すると、ファウストに真つ直ぐに手をかざす。

「チヨックメイト・・・じやな。」

「くつ・・・・。」

エドワードは憎しみに満ちた目でルシファーを見る。ルシファーの手の先に膨大な呪力が構成され始める。と、一つの影が二人の間に立ち塞がつた。

「ミリー!?

それは目に強い意志を抱いたミリーだった。

「止めてください。」

彼女は決然と言い放つた。しかし、さすがにルシファー。顔色一つ変えず脅しにも似た一言をかける。

「お前がかばつたところでその後ろの奴も巻き込まれて死ぬぞよ。そんなに死にたいのか？」

「かまいません。エドワード様のためです。」

稜はその言葉が何故かひつつかつた。しかし、ルシファーは敵の首でも抑えた気分でいるのかそのまま言葉を紡ぎ始めた。

「デビルズワード「極無の光線」。」

ルシファーの手の先にあつた呪力が大きくねじれ、光輝く巨大掘削機のような形になると、かなり速いスピードで走り出し、そして直撃した。

「ミリー…」

稜が叫ぶと煙の中から二つの影。それはミリーとエドワードだった。「何じやと？」

ルシファーの顔に初めて驚愕の色が浮かぶ。

「それがあなたの攻撃なら大したことはないわね。私の中間体も破れないのなら。」

「中間体って俺と同じ…。」

「そうよ。・・・まあ、そんな話はどうでもいいの。今は私たちの宿願が叶いそうなのだから!」

ミリーはこれまでにないうつとりとした恍惚の表情で言つ。

「ああ・・・。さあ、はじめましょうファウスト。・・・私たちのやり残した全てを叶えるための儀式を!」

「ああ・・・。いべぞ! コストウス!」

「はい!」

「融合練成!」

二人の言葉が重なり激しい風が起る。禍々しい力のそれは、やがて、夜の光に集まる虫のように次々と光る物体が集まり始め、そして、膨大な量になつた。

「コストウス。」

ファウストの何かを含めた声を聞きると、彼女は惜しげもなく肢体をさらした。

「なんだよ、あれ・・・。」

稜はそれを見て絶句するしかなかつた。それは小夜の四肢と似た文字の彫られていたからであり、そして、その文字は今怪しく光つていた。

「なるほど、妾ら悪魔まで騙した一生に一回の大ばくつとこう」とかの・・・。」

ルシファーは冷静に言つたが、目は怒氣を孕んでいた。

「どういうことなんだ？」

稜が訊くと、ルシファーは相手の様子を見ながら答えた。

「妾の拠り所である小夜の四肢は偽物じや。あれとはよう似てはおるが、こつちのは魔界と繋げていたがために呪力が吹き出し、また妾が小夜に憑依することができた。・・じゃが、稜。おかしいと思わんか？」

「ええと、何が？」

「妾の腕はもとは「ファウストの四肢」と呼ばれていたはずじや。じゃから、この腕から放たれる力は呪力。そして、ファウストは悪魔陣から悪魔を召喚するために己の体内に呪力を注ぎ込んだはずじや。しかし、ファウストは鍊金術師であると同時に魔術師でもあつた。ということは中和反応が起きて消えるはずじやろ。なのに、消えないということはあの目の前の女、コストウスとかいう人間が中間体じやつたことを考えれば話は簡単。要はこの腕はあやつのものだつたということじやよ。」

「じゃあ・・・！」

「うむ、妾の同胞を呼び出すために体に陣を書いたのはあやつ。そして、全てを悪魔に奪われたのもあいつじや。」

「なら何でこんな状況に？」

ルシファーは少し稜を見て神妙な顔つきで言い放つた。

「ここから先は悪魔以外は知らん話のじやが、実はの。傍で召喚の手伝いをしていたファウストがその悪魔を引き止め、己の体を生贊にコストウスを呼び戻したのじや。しかし、その際にそのときの

悪魔はファウストの四肢を引きちぎりユストウスにくつ付けてから連れて行つたらしい。とはいえ、記憶がないままでは困るからと状況がそれらしくなるような状況を書いて、のちの文献としたのじや。

「それで、エドワード……じゃなくてファウストは？その流れだと魔界へ行つたんじや……。」

「それがの、ファウストは我々がその魂を奈落へ落とすより前に天界から「召喚命令」が下つての。後にユストウスが国一つを滅ぼして奴を蘇らせたと聞いた時は驚いたものじやつたが、意図が読めんくての。結局放置した。しかし……、何万という人間の命を吸い半ば不老不死の状態になつたファウストが「銀の夜」などという組織を作り始めたあたりから、鋭い者が何かに感づいての。魔界で保存されていたユストウスの四肢を地球に生まれる人間の誰かにつける動向を探らせてみてはという意見が出ての。代表として妾が憑いた。」

「…………。」

「じゃが、それすらも罷じやつた。要するにファウストと悪魔は結託しておつたのじや。たぶん、悪魔は好物の人間の魂と引き換えに再び事を起こすのに必要なユストウスの腕を再び世界に召喚させたのじやろう。」

「つてことはまさか、今……！」

「そうじやな……。ぐうつ！？」

痛みに顔を歪めるルシファー。四肢はユストウスと同じように光り輝いていた。

「まずいの……。もう陣は完成しておる。今更止められん。……じゃが！稜！貴様の力なら勝てる！」

「お、俺！？」

「そうじや。稜の力は魔力も呪力も己のものとしてほぼ無限に使える。それならば、あの風の中心に行け！」

「で、でも……。」

目の前には苦しむルシファーもとい小夜がいる。しかし、ルシファーの表情がふと緩み、その声を聞いた時稜は走り出していた。

「稜・・・。頑張つて・・・。」

それは小夜のものだつた。

「うおおおおおお！」

雄たけびを上げながらまきあがる風に突つ込む稜。ある程度行くと体が浮き上がり、激しい回転に巻き込まれた。それとほぼ同時だつた。

「融合術」「ユグドラシルの生命」！

光輝いた光の塊がものすごい勢いで四方へと拡散していく。それとほぼ同時に一人の四肢が直視できないほどの輝きを始め、そして、それが起つた。

軽い浮揚感。そして、圧倒的な一つの力。そして、爆風。

稜は地面に叩きつけられ、そして、少しして痛む全身を無理矢理動かして顔をあげてそして呆然とする。

何もない。自分の体を支える大地以外の何もかもが消えている草の一本すらもない。

「ふはははは！やつたぞ！俺はやつた！俺は・・・、俺は・・・、俺は・・・！」

あとは声にならないらしく泣いている。稜はその様子を見ながら何も考えられなくなつていた。

（皆は・・・？）

だが、自分と目の前のファウスト以外になんの気配も感じられない。

「ん？お前はああ・・・、例の中間体の奴か・・・。お前運良かつたな。」

「何がだ・・・。」

「お前、俺が術使つたときに呪力も魔力もないゼロの状態だつたらな。運良く助かつた。」

「中間体は外部エネルギーとして使うことができるんだから、皆生きてるんじや・・・。」

「それは少し違う。中間体といえどもそれを一度体内の構成物質としないと魔術も呪術も使えない。だから、それを一度にとられると、それを補うことができずに魔術師や呪術師のように消える。」

「何だと・・・」

「それと今この地球は俺のものだ。誰がどこにいるのか地球の「感覚」から伝つことができるが、今この地表にいるのは俺と、お前だけだ。・・・いいぜ、地球を自分のものとした感じは。たまらない。

稜は警戒しながらも尋ねる。

お前は世界の支配者を目指してたんじゃないのか・・・？

それも少し誇張があるが、正確には培養の文醸者を自指する。・・・・・

「復讐……。それだけのためにあんたは！」

「お前には分からんだろうな。・・・俺には妻がいた。そしてもうすぐ生まれそうな子供も！それなのに俺が異端審問にかけられた経験があるだけでどこかの病院も妻を受け入れず結局死んだ！どちらも！それに私を師と慕ってくれていた弟子たちは軍に無理矢理徴収され、無茶な指揮官のせいで全員死んだ。どちらも俺は死に際を見れなかつた！しかも、それだけじゃなくて毎日のように争いを続けこの世界を殺そうとする人間などいるまい。そう思うんだよ。」

- 10 -

稲は一度顔を伏せた。

そして、顔をあげ、強い口調で言った。

「あんたの意見は自分が過去に納得したいがための我儘だ。確かにひどいかもしない。俺には妻とかいたこともないから分からないからその苦しみも理解しきれない。それでもあんたのやつてることは誰も喜んだりしない。・・・現にあんただつて泣いてるじやないか・・・。」

「ファウストは驚いたように声をあげる。  
「私が泣いてる?」これは歓喜の涙だ。

私が泣いている？これは歡喜の涙だ。

「嘘つけ。」

「一つ言わせてもらつていいか？」

「何だよ。」

「お前も感じ始めているだらつゝ、地球の鼓動を。」

「ああ。」

「私はこの地球の支配者が一人でなければ納得できなくてね。 . . . 死ね！」

ファウストが突っ込んでくる。稜はそれを片手で受け止めると、そのまま流そうとして、しかしファウストがその手をつかんだまま自身の勢いを流し、稜を地面に叩きつけようとする。

「デビルズワード「漆黒の翼」。」

稜の背中に可視できる黒い翼の幻影ができ、回避すると、逆にファウストに一撃を与えるとする。ファウストはそれを受け止め、再び乱戦になる。

「まつたく！ 最後の最後で忌まわしい敵だ！」

ファウストは闘いながら叫ぶ。稜は答えない。

「「紅蓮の常深」！」

ファウストは強力な火系魔術を唱える。

「デビルズワード「魔神の息吹」！」

それを稜は風で受け流す。

それからしばしの間神の業にも等しい戦闘が行われた。しかし、稜はいくら力があると言つても戦闘経験は乏しく、見る間に熟練の猛者ファウストに押され始めていた。

「・・・・・・・・！」

ファウストの呪文が当りそこね稜は声にならない悲鳴をあげる。

「ふふ、ようやく捉えた・・・。」

ファウストは勝利を確信する笑みで稜を見る。彼は一方の手を真つ直ぐ稜に向けると、詠唱を始めた。その力の大きさから稜は危険を察知し逃げようとするが、体が思つように動かない。

「どうだ、今の気持ちは？ もうすぐお前は死ぬ。感想を言つ暇を

えてやるつ。」

ファウストは余裕然と振舞う。だが、その間にも手の先には光が凝縮してきている。

「…………怖い。」

稜は小さく小さく呟いた。それがファウストには気に入つたらしい。

「そうかそうか、怖いのか！」

ファウストは嘲るように笑う。しかし、その笑顔は直後に凍りつく。

「だけど、諦めなければその怖さは屁でもないぞ！」

「よく言つた！「炎燕の刀」！」

「「エレノールの聖水」。」

稜の背後から水と炎の呪文。ファウストにそれは直撃する。

「お前ら！」

「すまないな。少し遅れたようだ。」

「何だ！？お前らはーーー！」

ファウストが激怒して問う。だが、彼は後ろからの攻撃にそれを中断することを余儀なくされた。

「愚かなことをしたものだな、エドワード。」

「「審問」ワレイドだと・・・？」

痛みに顔を歪めながらワレイドを見る。

ワレイドはかつての頭首を見据えて堂々と言い放つ。

「我らは今ここに「銀の夜」、「悪魔陣の創造主」の有志達とともに世界の恒久の平和を維持するための組織、「金の朝の創造主」を創設することを宣言するーーー！」

「ば、ばかな・・・！」

ワレイドの言葉と同時にかつては敵同士だった魔術師と呪術師が次々と何もない空間から現れる。

そして、稜にもよつやく事の次第が分かつた。

「異次元転移・・・。」

「そうだ。ルシファー殿にも手伝つてもらつてな。全員を魔界へ飛んでいた。幸い魔界でもファウストに加担した悪魔の肅清が終わつ

ていて、わしらは一人として命を奪われることなくこいつして戻ってきた。」

「くそがつ！」の、ゴミ虫どもめー、つじやうじやと……。」

「暴言もそこまでにしないとな。……まったく私が嵌められるとは……。」

そう言つて現れたのは、白銀の長髪をなびかせた若い男。

後ろにいた渡部が「悪魔陣の創造主」の盟主ファン・ナバーロ様だと教えてくれる。

ファン・ナバーロはファウストを見据えると、目にもとまらぬ速さで呪術を繰り出す。

ファウストはきつぎりで防御するが、四方からくる呪術や魔術を避けきれず、次々とダメージを食らう。あつという間に形成は逆転していた。

しかし、第一波の攻撃が始まつたとき稜は嫌な感じがした。そしてそれは現実のものとなつた。

「てめえら、ふざけんじやね……！」

その恐ろしいほどの大音量は同時に障壁になつていたらしく魔術、呪術ともに全て跳ね返される。防御が間に合わなかつた人間が次々と倒れしていく。

「はあはあはあ……。どいつもこいつも、俺の邪魔ばっかりしやがつて！皆死んでしまえ！」

そう言つと、彼は恐ろしいまるで地獄と直結しているような声で歌い始める。

歌詞の内容も言語も理解できないが、彼の周りに光の輪ができたとき、稜は大声で叫んでいた。

「全員固まつて守備態勢！」

「遅い！融合術「光爆の輪廻」！」

光の輪が急回転を始め、次々と光線が地面に降り注ぐ。一発一発がけた違いに強く次々と被弾し、消えていく。

「なんという力……。」

フレイドもうめぐことしかできない。

「もうだめか……」

すでに再度の攻撃準備が始まっている。一度田はぎりぎりで防げたが、もう力は残っていなかつた。

「さあ！全員死ね！」

光線が地上に降り注ぎ……、そして終わつた。もつもうと舞い上がる砂埃を見てファウストは額に大粒の汗をかきながら笑う。

「やつたぞ……！やつと俺は……。」

「俺は……何だつて？」

その声にファウストは凍りつき、そして吹き飛ばされていた。ファウストはゆっくりと起き上がり、信じられないようなものを見る目で呟いた。

「馬鹿な……何故貴様が……？」

そして、全てが風で流されたのを見たときファウストはようやく自分がへまをしたことに気づいた。全員生きている。そして、じつとファウストを睨みつける少女。「予知の魔術師」から教えてもらつていたことを今になつて思い出した。

「悪魔を守る水……。」

「貴様の暴挙、もう見過ごしていられん。」

ファウストは己の体が燃えるのを自覚した。

「そして、炎……くそつ！光爆の輪廻……！」

再びファウストの周りに光の輪ができる全方位に発射される。

「その技見切りました！「レイノアシールド」！」

ファウストの周りにシールドができる技が跳ね返つてくる。エリスがいた。

「盾……。」

「ファウスト！「破壊の導き」！」

ナイフにも似た鋭い刃物が飛んできて刺さつたところから痛みを感じる。稜がいた。

「光……。」

「すまぬな、ファウスト。せめて後生は苦しまぬようにしてやれ。」  
「ビルズワード「虚無の空間」。」

ある一点から黒い円球が広がり始め、やがてファウストを飲み込んだ。ルシファーはそれを見送った。全てが・・・終わった。

「何でなの！？」

小夜の声が虚ろに響く。稜は悲しそうに微笑みながら、言った。  
「ワレイドさんによると、この地球はもうもたないらしい。だけど、  
その術が成功すれば、また元通りになる。」

「けど、稜が犠牲にならなくたって！」

「決めたんだ、小夜。ごめん。」

「そんな・・・。」

稜は周りにいる人間と視線を合わせていく。最初に合ったのは渡部。彼は静かに笑いかけると、優しい声で語りかけてきた。

「僕、実はあなたがたぶん初めての友人だったように思います。思  
い出は闘つてばかりでしたからあまりなかつたかもしませんが、  
それでも一日一日が本当に楽しかつた・・・。

もし、もう一度会える日が来たら今度は名前で呼んでもらえますか  
？」

稜は笑う。

「宗君か・・・。分かつた呼ぶよ。」

次に目があったのは山城。山城は一言それでも一番心に残ることを  
言われた。

「絶対に帰つて来て。」と。

次にレイル。彼はぶっきらぼうに稜の方を見ずに言った。

「お前とは戦つてばかりだつたな。だ、だが、エリスは渡さないぞ  
！今度帰つてきたら正式に勝負しろよ・・・。待つてるぞ。あと、  
お前との共闘悪くはなかつた。」

エリスは若干涙声で稜を見て母のような微笑みを浮かべて言つてき

た。

「いろいろありがと。あなたとの思い出は……いいこと悪いこと半々でしたね。まあ、これから…………あれ？何で涙が出てくるんでしょう？……悲しんですかね？あはは……今まで本当にありがとうございました。」

稜は最後に小夜を見る。だが、彼女は眼を合わせない。

他の人間はそんな二人の様子を見て心配そうに見ているのを感じて稜は苦笑を浮かべる。

事の起こうりは全てが終わった後のフレイドの提案にあった。

「もうこの星は復活できないほどのダメージをおつた。……しかし、ファウストが融合術なるものから全ての命を自分の力として吸い込んだのなら、逆に膨大な力を持つ人間の命を生贊にすれば、必ずや元に戻る。幸い魔術師も呪術師もいるし、できる要素は整つておる。ただ……、あまりにも強すぎる術故、失敗の可能性も否定できん。それでもやつてくれるのなら、儂のところに言いに来てくれ。」

それを聞いた時稜の心は揺れた。自分の命だけでこの世界は帰つてくる。……しかし一方でその事実に恐怖する自分もいた。まだ生きていた。そしてもうと世界を見ていたい。……けれどもそれは自分たちのいた世界ではない。彼は迷った挙句結局フレイドの提案を飲むことにした。

「そうか……。よく決断してくれた。君は英雄だ。」

フレイドの言葉を彼はほとんど聞いていなかつた。決行は明日で、術式は融合術「神の采配」というもので行われることだけしか頭に入つてこなかつた。

夜、静かな大地で稜は一人佇んでいた。別に何か用事があるわけでもなく少し一人になりたい気分だったのだ。だが、それは叶わなか

つたようで後ろからきた小夜と話すことになった。

「明日・・・なんだよね。」

「うん。」

「明日になつたら稜消えちゃうんだよね?」

「そうなる・・・と思う。」

「私と稜は一生会えないんだよね?」

「ああ・・・。」

その瞬間、頬に鋭い痛みを感じた。

「痛つ! 何する・・・。」

「何するんだ!」 そう言おうとして柔らかいもので唇がふさがれる。永久にも等しい一瞬。それは思ったよりも早く終わってしまった。小夜は眼から溢れる涙をふくこともなく、自分の心をぶつけてくる。「何で、何でそんな簡単に言えちゃうの!? 私、嫌だよ! 稜と離れるのはいや・・・。」

「小夜・・・。」

「だつて、好きだから・・・。稜が好きだから!」

「・・・俺も好きだ。・・・けど、これは俺たち以上に全ての人にかかる問題なんだ。だから我儘言つてられない。」

「そんな・・・。」

体の力が抜けた倒れそうな小夜を支えながら稜は優しい声音で約束した。

「俺、帰つてくる。待つてくれ、なんて言わない。待つのに飽きたら誰のところでも行けば良い。それでも・・・、帰つてくるから。」  
「期待しないで待つてる。」

二人は笑いあい、月夜のもとで優しくキスをする。やがて、日は昇り始め、そしてその日が訪れる。

「それではお願ひできますかな?」

フレイドの言葉に稜は頷く。そして、始まつた。魔術師側と呪術師

側からお互いの力を相殺しないように細心の注意を払いながら稜に力を注ぎ込んでいく。そして、一定の力が溜まるのを見計らって、稜は「この世の全てを包むような声で詠唱した。

「融合術」「神の采配」「

世界は光輝きそして収束する

エピローグ

小夜は大学一年生になっていた。気づけば、四肢の色は徐々に自分の肌の色に近くなり始め、浮かび上がっていた文字も消えていた。

「お、お付き合いしていただけませんか！？」

「ごめんなさい。私心に決めた人がいるので……。」

「そうですか……。」

校舎裏から去っていく男子学生の背を見送る小夜の背後から声がかかる。

「まったく人気だね、小夜さんは。」

渡部はにやにやした笑顔を浮かべ、横からぴょこっと出てきた山城に殴られる。

「デリカシーなさすぎ。あんた、そんなんだから彼女できない。」

「うるさい！僕は本当に僕を愛してくれる女性が現れるまで待つって決めたんだ。」

「言いわけ。」

「シャラップ！」

小夜は一人の会話を聞いて口元を押されて笑いながら、今どこにいるか分からぬ人間に想いをはせる。

「一体いつになつたら帰つて来てくれるの？」

「さあな？いつになることやら……。」

「早く会いたい……。」

「俺もそう思うよ。」

四人はうんうんと頷く。

「ん……？ 四人……？」

「つて、えつ……？ 稜……？」

小夜は信じられないものでも見たかのように驚く。それに稜は拗ね

たように笑いながら言つた。

「久野稜只今帰りました。」

「稜！」

小夜に抱擁された稜は真っ赤になりながら受け止める。

「稜！！！」

渡部と山城が稜に駆け寄る。さらに裏庭を校舎の二階から見ていた朝倉と佐倉が気づき、稜の元へと走り出す。

その日の夕方、「金の朝の創造者」の本部の一角で働いていたレイルとエリスは小夜からのメールを受けて周りの人間が驚くほど大声で喜びを表した。

一匹の悪魔が世界を見下ろしながら、その様子を見て微笑んでいた。

「これでハッピーハンドかの・・・。」

ルシファーはまだ満足そうに頷き、席を立つてどこかへと消えて行つた。

明日も明後日も彼らはともにあることを祈りながら。

## ハピローグ（後書き）

これで終わりです！かなり大雑把で稚拙な文章でしたが、読んでくださった方に感謝の意を捧げるとともに、今度は本編で描けなかつた人たちのことも書きたいなと考えたりしているのでそのときはまたどうぞご覧ください。感想募集しています。気軽にどうぞ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5540f/>

---

ファウストの四肢と魔術師

2010年10月28日06時52分発行